

賢はその場で、自分のスーツケースを開け、そこから小さな袋を一つ取り出した。

「*****」(長老、これは日本の扇子という、ハンドファンです。小さなプレゼントです)

長老はそれを受け取ると、早速袋を開けて中から扇子を取り出した。富士山の絵が描いてある。賢が使い方を説明すると、2, 3度扇いでみてから言った。

「*****」(ありがとう、これは涼しくていい。他の方への土産だったんでしょう?)

「*****」(いいえ、これはささやかなあなたへの土産です。お会いできるかどうか分からなかったけど、持って来ました)

「*****」(この山は?)

「*****」(日本の象徴、富士山です。ほとんどの日本人の心の中にある山です)

長老は富士山の絵をじっと見つめて、深い思いに入っていくように暫し沈黙した。長老をそこに残して、全員チェックインを済ませ、一旦部屋に行って荷物を置いてから、直ぐにロビーに集合した。グランドキャニオンを見に外に出てみることにした。もう日が落ちる。全員急いで車に乗った。長老が最高に美しいキャニオンを望める場所に案内してくれると言った。賢は何度か見た景色だったが、他の4人は初めての経験だった。10ドル支払って公園内に入ると、直ぐに Yavapai Point (ヤバパイ・ポイント) という場所に向かった。博物館は閉館していたが、そこからの眺めは格別で、コロラド川に掛かる吊り橋も見えた。4人は感嘆の声を上げた。特に二人の男性は興奮していた。

「すごいですね。写真で見る景色とは全然違います」

「わたし、このすとんと落ちるように削られた溪谷好きです。なんかあまりに凄くて、まだ自分の心の中に入り切れません」

梓が言った。

「うん、ぼくも大好きだな、この迫力が」

と賢が言うと、亜希子は

「この溪谷は長い年月を懸けて削られたのですね。わたし達よりも古いのかしら？」

と言った。二人の男性は亜希子の言った言葉の意味が分からなかったようで、キョトンとした顔をしている。幸いなことに先ほどまで曇っていた空が晴れてきて、夕日が雲の間からキャニオン全体に差し掛かっている。雲の陰があちこちに突き出している岩肌に映されていて、夕日に輝く岩肌のコントラストを一層強めていた。一行は夕日が落ちるまでにあまり時間が無いので、長老ご推薦の Hopi Point (ホピ・ポイント) に向かった。そこまで30分ほどかかった。長老が言った。

「*****」(あれが Cheops Pyramid (クフ王のピラミッド) だ、我々の呼び方とは違うけどな)

その岩山の下にコロラド川が蛇行しているのが見える。

「*****」(ここは夕陽を観る絶好のポイントだよ)

長老の声はこの雄大なキャニオンに響くかのように波打って、亜希子と梓の耳に響いた。

「*****」(ホピ・ポイントなんて・・・)

自分達種族の名前を付けられていることに、やや気分を害しているようだった。夕日が美しい。

「いつまでもここに居たいですね」

長谷部が亜希子に向かって言った。亜希子も頷きながら、感動を胸いっぱい吸い込んでいた。一行がホテルに戻ったのは9時半を回った頃だった。そこで長老と別れることにした。賢は長老がどうやって自分の家に帰るのか心配したが、長老は「そんなことは気にしなくてもいい」と言って、しっかりとした足取りで駐車場に向かって歩いて行った。賢は再びホピの長老に会えたことに腹の底から突き上げる感動を覚えていた。ホテルのレストランはまだ開いていた。5人は簡単に食事を済ましてから部屋に戻った。賢の部屋は一人部屋だった。部屋に入ると、急に意識が渦の中に巻き込まれてゆくのを感じた。目を瞑ると、一気に広い平原に投げ出された。コスモスのような薄いピンク色の花が一面に広がっている。静かに深呼吸をした。疲れがスーッと消えてゆく。賢は花畑

の中をゆっくりと歩いて行った。遙か彼方にぼつんと人影が見える。賢はそれがこの前会った祐子であることが分かっていた。祐子は駆け出して来た。賢も駆け寄った。ふたりは黙って抱き合った。ふたりとも、一言も言葉を発しなかった。何時しかふたりは輝く太陽の光に取り巻かれ、空中に浮き上がった。暫くして、ふたりが元の位置に戻ったとき、祐子の姿は消えていた。賢は意識を自分の部屋に戻した。頭の中全体に光のダストが広がっている。それはいつまでも降り注いでいた。賢は祐子に、何か大きな変化があったことを知った。それは、悲しいものではなく、暖かいものだった。賢は嬉しかった。シャワーを浴び、荷物を整理すると、ベッドに飛び込んだ。

翌朝、二人の男性は朝早くから日の出のグランドキャニオンを見るために出掛けていた。食事を済ませても、男性達は戻って来なかった。亜希子が二人の意識を追ってみた。どうやらシャトルバスの中に居るようだ。捉えた小塚の意識にピマ・ポイントという名称が浮かび上がっている。亜希子はそれを賢に話した。賢が言った。

「ウエストリムの一番端のビューポイントだ。これは、彼らを待っているのは1時間以上遅れてしまうな。約束の時間に間に合わない。彼らにメッセージを残して出掛けよう」

梓は済まなそうだった。彼らにはよく注意しておくと言った。賢は、二人宛てに「先に出掛けるので、ここに残って、この周辺の環境と、インディアンの生活に附いて調べておいて欲しい。ビジターセンターに行けば、かなりのことが分かるだろう。我々は夕方戻って来る」という内容のメモを残し、亜希子と梓を載せて出発した。グランドキャニオンの公園のパークを出ると、そこからは砂漠の中だった。特に大きな岩山があるわけではなく、なんとなく気抜けするような道だった。30分ほど走ると牛の群れに出会った。牛達は、車の来るのを意識もせず、のんびり歩いていて、悠々と道路を横切って行く。車はそこで5分近く立ち往生した。次第に岩の見える景色も少なくなり、やがて砂漠の一本道になった。所々突き出た岩が見える、退屈な道を2時間ほど走るとチューバ・シティという町を通り抜けた。あまり沢山の家は見当たらない。目

立つ建物と謂えば2階建てのモーテルがぼつんと立っているだけだ。そこを通り越すと、再び砂漠の中に入った。賢はこの砂漠が好きだった。少し赤っぽい瓦礫に近い砂漠だ。更に1時間ほど走ると、遙か彼方に平地の中に飛び出た、あの有名なモニュメント・バレーの奇岩が見えてきた。そこを走り続けてゆくと、漸く待ち合わせ場所サンデイ・インに着いた。3人はまるで計ったように12時ぴったりにホテルのエントランスを入った。賢はフロントに寄り、メッセージが無いかどうか聞いた。ミーティングのできる部屋を借りる予約をしてある。ホテルボーイは1枚の紙切れを出して見せて、「これか」と言った。そこには賢宛のメッセージが書かれていた。

「To: Mr. Ken Uchimi

From: Bernny Slipsoner

Hello Ken, how are you? I was very surprised at receiving your telephone. I'll be waiting for you at the meeting room in this hotel.

(内観賢さんへ、バーニー・スリップソナーより こんにちは、ケン、元気ですか？電話を貰ってびっくりしました。このホテルの会議室で待っています)

賢はホテルにクレジットカードでのデポジットを行ってから、会議室に向かった。会議テーブルの椅子には一人の初老の男性が座っていた。既に6人分のコーヒーが用意されている。賢たちがホテルマンに案内されて部屋に入ると、初老の男性は立ち上がって近づいて来た。賢とその老人はいきなりハグし合った。

「*****」(ケン、久しぶりだな。元気だったか?)

「*****」(バーニー、最後に会ったのはいつだったかな?)

「*****」(君が大学を卒業して、日本の会社に就職することになったときだから、12年前かな。元気そうだな。ところでこの人たちは?)
賢は亜希子と梓の方を向いて近くに来るように促してから言った。

「*****」(これが僕のガールフレンドの藤代亜希子さん、そして、こちらが、僕のアシスタントの田辺梓さんだ。・・・こちらが僕の生涯の友、バーニー・スリップソナーさんだ)

バーニーと二人の女性は握手をして挨拶を交わした。3人が席に着くとバーニーが言った。

「*****」(何を調査したいんだ？君はナバホの事は何でも知っているじゃないか)

「*****」(バーニー、ぼくはナバホの住まいや、生活に附いては知っているけど、あなた方が何故今のような形で生きているか、本当のところは分かっていないよ)

「*****」(そうか、それを知りたかったのか？本当は話せないこともあるのだよ。だけど生涯の友がはるばる日本から来てくれたのだから、できるだけことは話すよ)

「*****」(ありがとう。やはり、友達はいいものだな)

「*****」(ところで、腹減ったな。君たちは何か食べたのか？)

「*****」(いや、・・・それじゃ先ずレストランで何か食べよう。食べながらの昔話もいいな)

4人は一旦会議室を出て、ホテル内のレストランに向かった。そこではブッフスタイルの昼食が用意されていた。バーニーはフライブレッドというパン1つと豆スープだけを取った。賢と梓は何時もの通り並みの大人の分量を注文した。亜希子はサラダとクロワッサンだけだった。賢とバーニーは懐かしい昔話に花を咲かせた。亜希子と梓はただ黙って聞いていた。

食事が済むと、4人は再び会議室に戻った。3時間ほど調査のための会議をして、それからモニュメント・バレーを見て、バーニーの家を訪問することにした。賢が話した。

「*****」(バーニー、ナバホの人々の心の奥にあるものについて話してくれないか？)

「*****」(分かった。賢、これから面白い歌を聞かせるよ。)

バーニーはナバホ語で歌を歌った。3人とも意味は分からなかったが、何処か自然の中に佇んでいるような感覚を覚えた。バーニーが英語で歌詞を説明してくれた。

「*****」(昔からの祈りの歌だよ。こういう意味だ。・・・)

その人たちに命をあたえたものは 風
今わたくしたちの口をついて出て来るものも 風
風がくれた 生命
風が止むとき わたくしたちは死ぬ
今でも指の皮の下に 風の道が見える
わたくしたちの祖先が創られた時
風がどこに吹いていたかを
それはいつでも教えてくれる

どうかな？風、それがナバホの生き方だよ)

賢は、じっと聞いていたが、「ふっ」と息を吐いて言った。

「*****」(僕達の忘れている、古(いにしえ)の意識だね。やはり、バーニーに会って良かった。もう、ナバホには昔の心を思い起こせる人も少なくなったって聞いたけど・・・)

「*****」(それは仕方のないことだよ。人はどうしても生き安い方に流れるからね。昔のままの生活や生き方を保ってゆくことが如何に難しいか、ケンも良く知っているじゃないか)

「*****」(ぼくは、新しい世界の中に生きて、本来の自分自身を取り戻してゆくという生き方をしたいね。だって、大半の人が新しい生き方をしているでしょう。その人と同じように生きて、感じる。それも大切だと思うんだ)

「*****」(それができる人はいいいけどね。ナバホはスピリットからの声をどうしたら受け取れるかをいつも考えているんだ。だから、昔のように身を清め、心を鎮めて質素に生活しているんだ。今もナバホの人々は、自我を捨てること、世界全体を認識すること、我慢すること、全てを清らかに保つことという4つの信条を大切にしている。現在は随分便利な道具が出来たけど、そんなものを使ったらスピリットからの声は受け取れない。それを文字に表現したら、その時点でスピリットが伝えようとしている意味は失われてしまう。だから、ナバホには文字の文化も無い。その代わりに、絵を描くんだ。砂絵、あれは好みで描いているんじゃないくて、スピリットからのメッセージを表現しているんだよ)

梓が、遠慮がちに言った。

「****」(砂絵はデザイン画じゃないのですか？ちっとも知りませんでした)

「****」(あの砂絵には、同じものは2つと無いんだよ。だけど、最近の人々は何でもコピーしてしまって、真の意味を弱めてしまっているんだ。原画にしかスピリットの意思は伝わってないんだよ)

賢が言った。

「****」(参考までに、砂絵を描く方法を教えてくれないかな？手順と言った方がいいかも知れないけど)

「****」(ケンの頼みだから教えてあげる。真の砂絵は描くというより、描かされると言った方がいいかもしれない。実際に描き始める前に、もう出来上がっているんだ。絵を描く人間は、ただの伝達のための道具みたいなものなんだ。頭の中に出来ている絵を形、色、大きさ、とインスピレーションに従って表現してゆくだけなんだ。だから、誰にでも描けるわけじゃない。スピリットからのイメージの伝達を受けられる人間じゃないと、無理なんだ。昔から、砂絵を描けるものは限られていて、その技法は伝承されてきたけど、技法を知っていても駄目なんだ。それは普通の絵画だって同じじゃないか？なあ、ケン)

「****」(そうだね。絵には意識も載せることができるからね。日本にもそういうことが実際にあるよ。その絵を見るとやたらに死にたくなるような絵とか、逆に、嬉しくて、嬉しくて仕方なくなるような絵とか。でもそういう絵は、低次元のスピリットの影響を受けて描いた絵で、もっと凄い絵は、その絵を見て悟りを得たとか、その絵によって村全体が幸福になったとか、いろいろあるね。でも描かれたものが、人々に素直に受け入れられるためには、やはり、技法も大事だと思うね)

亜希子が言った。

「****」(わたくし、バーニーさんのお話を聞いていて、ドゴンのノンモのことを思い出しました。ノンモが描いた抽象的なイメージの記号ブンモン、具象化のイメージのヤラ、具体的な線のイメージで描いたトング、写実的な絵トンイ・・・これと同じようにして砂絵は出来る

のでしょうかね)

「****」(亜希子、良く覚えているね。砂絵のプロセスもドゴンの図象と同じように感じるね)

「****」(あの時のこと、わたくしはマラリヤの恐怖で動転していて、ほとんど覚えていません。亜希子さん、後で教えてくださいね) 亜希子は自信無げに頷いた。バーニーが言った。

「****」(ノンモと謂うのは地球が始まるときの神様のことですね。ナバホにも変わった話があるのです。こんな教えがあります。この地球に人間が住めるようにするために、水の神モンスター・スレイヤーが、人間の敵となるもの、人間を食べてしまう恐竜や、苦しめる化け物を全て退治してしまったが、退治できなかった怪物、それが貧乏と飢えと疲れと毛虱だったという話です。人間が常に努力をし、人のことを考え、衣食住に気を配り、清潔にしているようにさせるための知恵なのです。ナバホはそれを守って生きているのです。インディアンは大自然とともに生きています。その大自然の恵みを与えてくださる神、大いなる力それがワカン・タンカです。みなワカン・タンカに祈ります。ワカン・タンカは善悪を判断しません。賞罰を与えません。その力は善の力です。そして、大いなるスピリットです。スピリットから伝授された話は、文字に書き表さずに、口伝で人から人に伝えていきます。我々の祖先、アナサジ族の頃、人々は絵を描きました。その絵の示す意味を読める人はもう居ません。スピリットからのメッセージなのです。話も、絵も、文字で表現して紙に記録して図書館に貯蔵した方がちゃんと伝わってゆくと思うでしょう。ところが人々は直ぐに忘れ去ってしまいます。仮に、大切な話を秘密にし、自分達だけそれを守ろうとしたら、せいぜい10年か長くても15年で消えてしまうでしょう。話がなくなるということは全てが無くなるということなのです。それと同時に祈りも、歌も、笑いも、涙も一切が無くなってしまうのです。だから、祖先は岩に絵を描きそれを伝えてきました。わたしたちは、皆が集まると、繰り返しスピリットから伝えられた話をして、忘れ去られないように努めています。それと、わたしたちは笑いを大事にしています。お互いに冗談を言った

り、ユーモアで相手を笑わせたりします。わたしたちのことを白い人々は暗い、冷たい、野蛮な人間と思っているようですが、全く逆です。明るく、暖かい、最も本質に近い我々なのです)

3人は「なるほど」と思った。ナバホの人々の自然とともに、風のように生きる生き方に共感を覚えた。バーニーはいろいろな笑い話をしてくれた。中でも一人のインディアンと一人の白人のカウボーイが同時に亡くなって、二人とも天国に行ったときの話は、多少の皮肉が入っているとも思ったが、女性達は声を上げて笑った。それはこんな話だった。題名は「天国のドアを叩く」というもので、

「インディアンとカウボーイが戦争で同時に死んだ。先に天国に着いたインディアンがふと下を見ると、一緒に死んだカウボーイが意気揚々と空に向かって上がってくる。インディアンはカウボーイの成り行きを見てやろうと思って、天国の門の脇に身を隠した。やがてカウボーイがやって来た。ガン・ベルトを締めなおし、帽子を脱いで服のホコリを払い落とすと、威厳を示すかのようにゆっくりと天国の門を叩いた。インディアンはどうなることかと、じっと見つめていた。少しして、天国の門が重々しい音を立てて内側に大きく開いた。それと同時に、天空に轟くようにラップが鳴り響き、音楽隊の演奏が聞こえてきた。インディアンが身を乗り出して見ていると、中から大勢の天使達が色とりどりの風船や幟(のぼり)を持って現れた。チアリーダーのような妖精たちの踊りを先頭に、何発もの花火が打ち上げられた。紙ふぶきが空一杯に舞う中、沢山の天使、天女の歓声が響き渡り、大勢が集まって来て盛大なパレードが始まった。驚くことに花で飾られた空のオープンカーがカウボーイのために用意されている。カウボーイはオープンカーのシートに座ると、周りの天使、天女、妖精たちの甲高い歓声に手を振って応えた。車はゆっくり動き出した。パレードは延々と続き、インディアンも見ているのがくたびれてしまうほどだった。やがてオープンカーが歓声を背に、大きな門の中に入ってゆくと、門が音を立ててゆっくりと閉まった。辺りが水を打ったように、一気に静まり返った。事の成り行きの一部始終をじっと見ていたインディアンは、深く深呼吸をした。彼は嘗て、これほ

ど素晴らしく、美しく、派手なパレードは見たことがなかった。あまりのショックにインディアンは暫く雲に腰掛けて呆然としていた。やがて心も落ち着き、気を取り戻すと、インディアンはゆっくり立ち上がった。できるだけ落ち着くように自分に言い聞かせながら、ゆっくり長い髪を整え、鷹の羽根を頭に刺し直してから、カウボーイが最初に叩いた大きな門の前に進み出た。インディアンは落ち着いて、しっかりと門の扉を叩いた、1回、2回、3回、暫く待ってみたが、扉は開く気配がない。インディアンは再び大きな扉をノックした。今度は手が痛くなるほど、力を込めて打ってみた。ドン、ドン・・・ドン、ドン・・・ドン、ドンインディアンは叩き続けた。やがて、手が痛くなってきて疲れた頃、漸くドアの向こうで、何か動く気配がした。鍵を開けるような音がして、天国の大きな門の脇にある小さな通用門の扉がキーッと音を立てて、外に向けて開き、中から白い服を着た老人が身体を屈ませるようにして出て来た。その老人は手を振って、インディアンにこっちに来いと言っているようだった。インディアンはその老人のところに行った。老人が言った。「よく来た。あんまり遅いので、道に迷ってしまったんじゃないかと、心配した」老人は神様本人だった。インディアンは神様に、狭い通用門から入るように言われた。ラップも花火も、紙ふぶきも無い。天子や妖精たちの姿も見えない。あたりはしんとしている。インディアンは自動車が来ているのかと思ったが、どこにも見当たらない。「どうして、俺には歩いて入れと言うんだろう」これまで、ほとんど興奮することは無く、大抵のことには我慢ができたインディアンだったが、このときばかりは一気に頭に血が昇ってしまった。インディアンは無性に悲しくなった。「どうしてなんです？」インディアンは神様に食って掛かった。神様の白い服をわしづかみにして言った。「どうして、どうしてこんなひどい扱いをするんですか？僕はこんな扱いを受けなくてはいけないんですか？地上に居るときに散々痛めつけられ、差別されてきたのに、楽しいはずの天国に来てまでも、これほどまでに差別されようとは・・・ああ神様、あなたは本当に神様なのですか！」泣きながら、訴えているインディアンを、神様はその大きな胸で抱きかかえるようにして、

通用門の影につれて行くと、あのあらゆるものにお与えくださる慈悲と抱擁の優しい声でこうおっしゃった。「お前は、さっきのパレードを見たのだね。あのことを言っているのだろう。そんなことで怒ってはいけないよ。あのカウボーイは特別だったのだよ」

「特別！特別ですって？あの白人のどこが一体特別だって言うんですか！？」インディアンが泣きながら、肩をわなわなと震わせて訴えると、神様は微笑みながらこうおっしゃった。「実はあれがここに来た、はじめての白人なんだよ」

亜希子と梓は大きな声を出して笑った。それを見た賢とバーニーは顔を見合わせて噴出してしまった。皆で、暫く笑い続けた。亜希子が言った。

「白人の人たちが聞いたら、きっと怒りますわね」

梓も、笑い止めるのがやっとの思いで言った。

「わたくしたち日本人は黄色いから、もっと天国に入りやすいのかしら？」

賢も笑いを堪えながら言った。

「今の日本人は、白人の真似をしているから、顔は黄色くても、頭の中は真っ白だろうね」

その言葉を聴いて、また、全員が笑った。笑いが収まると、賢が続けた。

「日本人もナバホと同じ経験をしているんだよ。知っているだろう？」

「明治維新の頃のことですか？」

と梓が言うと、亜希子が

「縄文から弥生に移るときのことをおっしゃっているのでしょうか？」

と言った。賢は二人の心の動きに気遣いながら言った。

「一番大きく変わったのは2000年ほど前の、弥生人による縄文人の凌駕だね。日本人の心はインディアンと同じようだったんだ。最近の科学者が分析したところによると、どうやら、日本人とインディアンとは共通のDNAの情報を持っているらしい。そのDNAのスイッチをONさせていたのが縄文人なんだと思う。その縄文人が知識と技術を持った渡来人に征服されてしまった。そこで血が混ざり、現在の日本人が出来上がってしまった。弥生人だ。そして、それが海外から押し寄せるいろ

いろなものの影響を受けて意識が変化し、何度か外国からの渡来文化、特に文字を基にした宗教や教育、そして思想まで入ってきて、もう本来の自然界と調和した生き方をする日本人がほとんど居なくなりました。まず形を作って、その中で苦闘を繰り返す時代が続いたんだ。その結果、今の日本人になった。そこがナバホの人たちと違う所だね。まあ、インディアンも自治区で、純粹さを維持するようにならばいいけど、自然に混血の状態になってゆくから、結果的には将来は日本人と同じ経緯を辿るかもしれないね。それで、日本は必死になって、古の教えを取り戻そうとした。潜在意識の中でね。だけど最後に明治維新で、必死になって、守ってきた日本としての特質を全て捨ててしまったって訳だね。今じゃ、物理的に快適な生活を求めて、血眼になって生きている日本人の姿しか見えないね。日本人も来る所まで来たから、大抵のことは体験しただろう、もう、内側に入ってゆくしかないんだよ。分かるかな？」

日本語で話している賢の姿をじっと観ていたバーニーは、微笑みながら言った。

「*****」(ケン、何の話をしていたんだ？楽しそうだったじゃないか？)

「*****」(バーニー、ごめんなさい。日本人とインディアンは共通のDNAを持っているし、同じような経験をしたって話をしていたんだよ。日本人は今から2000年以上前に、あなた方と同じような生き方をしていたんだ。それが、海外から来た圧倒的多数の兵士に征服されて、自然の中で生きる生き方を見失ってしまったって話ですよ)

「*****」(それは面白い話だね。それで、日本人はどんな風に変わって行ったんだ？)

「*****」(一つは、邑社会に潜り込んで、自然信仰とでも謂うか、眼に見えないものを崇める生き方をしたんだ。でも、海外から渡来した物質文化が影響して、その崇める対象も、恐怖に結びついたものになってしまった。畏敬でなくて、恐怖だ。それと、もう一つは縦の仕組みを作り出し、日本の建国の歴史を作り出した。それが現在の皇室を軸にする

流れで、日本人はその皇室を天孫降臨という日本のルーツに繋がる話に結び付けているんだ。本来の日本の姿に戻すには、かなりの時間がかかりそうだよ。でも、日本人の心の奥には、仏教的な心と、神道的な心が入り混じっていて、両方とも OK という妥協的なところがあるんだ。それが縄文人の持っていた意識に通じている。何でも受け入れることが出来るんだな。君たちと同じさ。でも、両方必要なんだな。愛の理念と形とね)

「****」(ケン、君は昔から、何か他の人たちと違ったものの見方をしているね。我々インディアンの中にも居ないし、勿論白人達の中にもそんな考え方をする人は見たことがないよ)

「****」(ここに居る亜希子や梓は知っているけど、僕はね、この世界は、本来の世界を3次元空間に写し出した世界だと認識しているんだ。だから、インディアンも、日本の縄文人も写された元の形に近い状態で生きていたと思うんだ。そこに、様々な仕掛けを通して写し出された人たち・・・君たちがいう白い色の人たち、日本で見る渡来人・・・が来て、別の方法で写し出したら、もっとすごいぞと言わんばかりに、国中を席卷したんだ。僕は、いずれも写し出されたものだから、そのままの形に完全に立ち返ることと、変形を繰り返して、全く異なった形で写し出された社会を認識すること、この両方とも意義があることだと捉えているんだ。むしろ、問題はその中で経験した内容を、どう、自分自身にフィードバックするかということだと思う。多分、この世界から一つ次元を上げると、それらが全部見えるんだと思うんだ。ぼくらは、そろそろ、次元を一つ上げる準備が出来てきているように思う。インディアンにも、白人にも全体を包含した見方が必要だと思っている)

「****」(ケン、君の話は、いつも難しく、完全には理解できないんだ。どうして、そんなことを考えることができるんだ?)

「****」(僕にも分からないけど、直感かな?自然にそう感じてしまうんだ。バーニー、気分を害したら、済まないね)

「****」(いや、君の話は、スピリットからの伝言のように僕の心に響くんだ。だから、何時か君が戻って来て、また話をしてくれるん

じゃないかと思っていた。僕の予感は当たったね)

一行はそれから、バーニーに案内されて、点々と離れて建つナバホの村々を廻った。ホーガンと言われる半球状の建物もあったが、木造の家もかなり多かった。1軒のホーガンの家を訪れてみた。中は見掛けとは違いしっかりとした木組みで出来ていて、天井に明り取りの穴が開いている。梓はこの地だから出来る構造だと思った。途中、モニュメント・バレーの中に入った。そこも居住区だ。砂漠の中に突き出た赤い砂岩は、もうほとんど崩れるかと思われるような繊細なイメージを3人に与えた。以前は岩の上に乗る人々も居たようだが、今は禁止されているとのことだった。車を停めて外を眺めていると、2人の子供が寄って来て、亜希子が開けている車の窓から手を差し込み、「ポップ、ポップ」と言った。バーニーが居るのに気付かなかったようである。バーニーがナバホ語で一言話すと、子供達はあつという間に姿を消した。「最近は観光客相手のビジネスがかなりの割合で入り込んできているんだ」とバーニーは言った。ここに住む人々の多くは、インディアン・ジュエリーを販売して生計を立てている。ターコワイズと銀を使ったアクセサリーや、七宝焼きのようなガラス細工のもの、タペストリーや、ドリーム・キャッチャーという、まじないの飾り、ポテリーと呼ばれるツボや、トレイのような焼き物。主に土産物を作るのを家業にしている家が多かった。砂絵を描いている家を見ることはなかった。それらの家々はいずれも、質素な生活を営んでいて、未だに古からの教えを、厳格に守り続けている人たちもいると、バーニーが言った。賢も、梓も意識改革については、口にしなかった。既に、多くのことを教えられていた。彼らの中には改革されるべき意識は無かったのだ。賢はバーニーと一緒に一旦ホテルに戻って少し休息を摂ってから、グランドキャニョンのホテルに戻ることにした。

車は荒野を5時間15分走り続けた。一行がホテルに着いたのは午後9時半だった。小塚と長谷部はロビーで待っていた。賢たちがエントランスを入ると、二人は駆け寄って来た。

「申し訳ありませんでした」

「申し訳ありませんでした」

小塚と長谷部が言葉を連ねて言った。梓が少し厳しい顔をして叱った。

「ビジネスマンが出張した際に絶対忘れてはいけないことは、出張先の行動は全て業務の内だということよ。ここには遊びに来ているんじゃないのよ」

長谷部が唇を噛み締めて応えた。

「申し訳ありませんでした。十分承知していたつもりだったんですが、グランドキャニオンの魅力に勝てずに、「朝早いから、朝食までに帰れば大丈夫だろう」と高を括って出掛けてしまったのが間違いでした。恥ずかしい限りです」

「僕は、グランドキャニオンのリムを回るのにあれほど時間が掛かるとは思ってもみませんでした。とんだ失態です。弁解の余地はありません。どんな制裁も覚悟しています」

二人は真剣な面立ちでいる。賢が言った。

「いい経験をしたね。心の赴くままに行動するのは気持ちがいいだろう。自分が梓の外に居ることに気が付くまではね。それに気が付いたのが人類なんだ。気が付かずに居ればずっと天国に居られたのに、いろいろなことを知ってしまったばかりに、自分の行動を省み、他の人たちのことを考え、仕事のことを考え、あれこれ悩んで、苦しんだ。そうだろう」

「はい、リーダーのおっしゃるとおりです」

小塚が言った。長谷部も頷いた。

「今言ったことの意味が分かるかな。MIプロジェクトで意図している“人間が意識的に生きる”ということは、君たちが意気揚々とホテルを飛び出したときの様な感覚で生きるということなんだ。ただ、一つ欠けていたのは、自分たちが見えていなかったことだね。いずれにしても、いい経験をしたよ」

梓が言った。

「リーダー、そんな甘いこと言ってはいけません。サラリーマンたるもの、会社から給料を貰っているのですから、自分の職務を全うするために、全力で働かなくてはならないのに、自分の楽しみを、業務に優先さ

せるとはもってのほかです」

「まあ、まあ、田辺さん、彼らも反省していることだし、これからはこんなことはないでしょうから」

賢は梓が意識的に二人を叱っているのを知っていたが、引き時を作ってやろうと思っていた。小塚が言った。

「僕たちはもう、二度とこのような失態のないように、心して任務を果たすべく努めます」

「こんな所で立ち話も何だから、レストランに行こう。僕らも長時間の砂漠のドライブで疲れているし、食事もまだなんだ。なあ、田辺さん、藤代さん」

二人の女性は頷いた。全員レストランに入った。小塚と長谷部も夕食を摂りそびれていた。二人の青年が並んで座り、賢たち3人が二人に向かい合って、同じ列に座った。青年達がステーキを頼み、賢たちはハンバーグを頼んだ。食事が運ばれて来ると、二人の男性は食べるように食べ始めた。

「それで、グランドキャニオン周辺のインディアンについて何か変わったことは発見できたのかな？」

賢が話の方向を変えると、長谷部がここぞとばかりに喋り始めた。

「はい、リーダー、ビジターセンターの「インディアン」のコーナーのパネルに、アメリカン・インディアンと日本人は同じDNAの情報を持つということが、説明されていました。それはごく最近の情報らしくて、ガラス張りのケースではなく、追加された「**American Indian in the world**」(世界の中のアメリカン・インディアン)と題された特別展示の中にありました。「アメリカン・インディアンは日本人やイヌイトと同じモンゴロイドで、アメリカ原住民のインディアンは太古の昔、アジアからアリューシャン列島を渡って、アラスカ経由で現在のアメリカ大陸に入り、住み着いたと思われる」と書かれていました。僕も、インディアンの人たちを見ると、なんか日本人に似ているという印象を持てしまいます。色は我々より赤黒いですけど、それは環境の影響で変化したんじゃないかと思いたくなります。インディアンも背が低くて、ず

んぐりした体型でしょう。日本人に似ていると思いませんか？」

「うん、いいところに気が付いたね。君たちはグランドキャニオンの朝日を見に出たときに、ビジターセンターに寄ったの？」

「いいえ、1時間以上も皆さんを待たせていると思って、焦って帰ったんですが、もう皆さん出掛けられていて、フロントからメッセージを渡されて、ますます焦ったんです。何とかしなくてはと思い、もう一度サウスリムに戻って、直ぐにビジターセンターに入ったんです。スライドも見ました。インディアンのことが書かれている展示を見て、必要な部分はメモしてきました」

長谷部は必死になって、自分達の調べたことを説明した。それらの内容はほとんど賢の知っている内容だったが、賢は黙って聞いていた。

「大分、詳しく調べたね。それで、長谷部君と小塚君はアメリカン・インディアン生き方から、何かMIプロジェクトに役に立つヒントを得たのかな？」

小塚が言った。

「僕は縄文人のことはよく分かりませんが、アメリカン・インディアンのように生きれば、今の物質偏重な人間の意識は変わってくると思います」

それを否定するように長谷部が言った。

「でも、その、精神性重視の生き方ですが、ぼくには、一概にインディアンのような生き方をするのが理想的だとばかりは言えないと思うんです」

「それじゃ、長谷部君は、どうするのがいいと感じたんだね？」

「はい、アメリカという、現代の地球上で最も物質文明を発展させた国があって、人々は忙しく働くけど、休日にはとても快適に過ごしている。何時も何か新しいことを追い駆けていて、発見や発明を繰り返している。そして、努力して何かを達成すると、最も快適な生活を送ることができる。そういう国の中に自然のままに生きている人々の住む保護区があって、アメリカとは独立の行政を行っている人たちが、物質に捕らわれない純粋な生き方をされていて、あまり物質的な発展を望んでいない。お金

にも出世にも執着していない。毎日神に感謝を捧げ、宗教的な生き方をしている。どちらが、生き甲斐があるかと思うと、僕はアメリカという国の方だと感じてしまうんです。アメリカの方が未知の分野が沢山あるように思います。だから、僕が生きるなら、アメリカで生きたいと思ってしまいます」

小塚が口を尖らせて言った。

「それはお前、おかしいよ。物質中心の社会を精神重視の社会に変革するのに、物質中心の社会に生きようとしたら、元の木阿弥じゃないか」

「おまえは頭が、固いんだよ。インディアンの人たちだって、日本に行くときには飛行機に乗るだろう。便所だって、汲み取りより、水洗の方が清潔でいいだろう。それともお前は汲み取りが気に入っているのか？」

「なに！お前な、アメリカのように物質偏重の社会を突き進むと、どんなことになるか、結果が出ているじゃないか。それとも、お前にはリーマンショックは難しすぎて分からないか？」

「なにー！お前は上の方針が出れば、黙って何でも従う、イエスマンなんだよ」

「なにー！もう一度言ってみろ！」

梓が仲裁に入った。

「あなたたち、いい加減にきなさい。そのナイフとフォークをテーブルに置きなさい。危ないじゃない。人が見ているわよ。静かにきなさい」客はほとんど無かったが、最も離れた所に座っていた老夫婦が賢たちのテーブルの方を見つめている。二人はいきり立っていたが、ナイフとフォークを置くと、コップの水を口にした。賢が言った。

「小塚君と長谷部君の二人の考えは、それぞれに面白いじゃないか。ちょっと質問してもいいかな？ 先ず小塚君から、君はどうしてインディアンのような生き方をしたら、精神性が改革できると考えるんだ？」

「はい、リーダー、僕は人間の欲望が、物質文明を助長させているように感じます。今の人々は出世して、立派な家を手に入れ、そこに住んで、必要なものは、お金を出して買い、美味しいものを食べ、時間があれば旅行を楽しむ。そんな生活を夢見て必死に働いています。これが物質偏

重を生み出す元になっていると思います。それを正すには、普段の生活のしかたから改める必要があると思います。僕はインディアンの人たちのように、心を純粋にして、質素な生活をするのが一番近道だと思うのです。そうすることで、日本人は大昔の心を思い出すんじゃないかと」賢が言った。

「そうか、インディアンのような生き方、これをMIプロジェクトとして、日本人の生き方の目標になるように、方向付けするのがいいということだね」

「リーダー、その通りです。これこそが我々が目指すべき道だと思います」

長谷部はそのイラツキが顔に表れていた。

「僕にも話させてください」

「いいとも。君の考えを訊かせてくれるか？」

長谷部は待っていましたとばかりに、話し始めた。小塚はまるで、それを無視するかのように、ステーキを大きく切り、それを口に頬張った。

「はい。僕は現代の人間には、インディアンのような生活に戻ることはできないと思います。一旦、物質文明の味を味わってしまったら、もう、昔のように、うまいものも食わず、ただひたすら自然との調和の中で生きるなんてことは難しいと思います。ですから、僕は現代の人間が生きているこの社会の中で、自然に意識が物質中心から、精神性を重視した生き方に向かうように指導するのがいいと思います。MIプロジェクトもそのような方針にしたほうが、より多くの人たちが賛同し、その示唆に従うと思うのです」

「長谷部君、それは分かるけど、それじゃ具体的にどうしたらいいと思うのかね？」

「はい、僕の考えでは、いろいろな所でキャンペーンやイベントを打ち、そこで人々の心を変えるようなメッセージを送り、政府主導のWEBサイトを立ち上げて、そこで精神性を重視した生き方について指導し、子供達の集まる場所で、愛の大切さを教える・・・そういったことを行ってゆけばいいと思います」

口をもぐもぐさせながら、小塚が言った。

「そんなこと、それこそうまく行かないよ。フェニックスの意識改革プロジェクトの進捗状況を見ても、そういうやり方じゃ、プロジェクトがうまく軌道に乗らなかったことは実証済みじゃないか」

長谷部はむきになって言った。

「じゃ、お前の言うようなやり方でうまく行くとでも思っているのか？東京に住んでいる人たちが、原始的な生活に戻れるわけ、ないじゃないか？お前の言うことは現実的じゃないんだよ」

賢が間に入った。

「君たち、いいかい？君たちの考える方法は、それぞれ、一つの意見なんだから、そんなにいきり立つ必要はないよ。まだ他にも選択肢があるだろうしね。例えば、一般の人たちには、今までの生活をしてもらって、その人たちとは別に、精神性を重視した生き方を望んでいる人たちを集め、どこかに、今のインディアンリザベーションのような自治区を用意して、その中で、実際に精神性を重視した理想的な生き方をしてもらおう。そして、そこの生活は常にテレビやWEBでモニターできるようにして、多くの人たちにPRしてゆく……まあ、こんなやり方だってあるしね」

小塚と長谷部は2、3度頷いた。小塚が言った。

「リーダー、それがいいですね。いきなり日本人全体なんてとても無理だと思います。だから、特別の自治区を作って、その中で理想的な生き方をしてもらおう……うん。これなら、問題ないですね」

長谷部も賛同したが、小塚とは意見が違うと言わんばかりに

「その自治区の中に、現代の物質中心の社会でも、物質偏重に走っていたり、その傾向のあるものは外して、精神と物質がうまくバランスしている部分や、精神性を高める働きのあるものを、取りいれて運営したらいいと思います。そこではアメリカン・インディアンの生き方だけじゃなくて、世界中のあらゆる国々の文化の中で、精神性を高めている国の具体的な活動例を取り入れるなどしたらいいと思います」

長谷部と小塚がお互いに牽制し合っているのが分かる。賢は言った。

「まあ、この話は帰国してから、ゆっくり検討しよう。君たちもなかなかいい考えを持っているじゃないか」

賢に褒められて、二人の頬がやっと綻んだ。

「今日は忙しいんだから、食事の後でグランドキャニオンを見に行ったりしちや駄目よ」

翌朝、食事を摂りながら梓が二人の男性に言った。小塚、長谷部の二人はきまり悪そうに苦笑いをした。

一旦フェニックスに戻ると、4人は最初の日と同じホテルに宿泊した。ストックホルム行きは夕方の便だったので、翌日の午前中は賢の両親とともに過ごすことができた。母のエリザベスはとても陽気に4人に対応した。エリザベスの案内でインディアンの経営する土産物店を覗いてみることにした。小塚と長谷部はバッファローの角やインディアンのハット、ドリーム・キャッチャーなどの土産物を物色した。亜希子は一人でショーウインドウに飾ってあるターコワイズの指輪をじっと見詰めていた。祐子がいつも左手の薬指にはめていた指輪を思い浮かべていた。亜希子は祐子の指輪に似た、同じデザインの男性用指輪を1つ、女性用を2つ買った。梓は店の主人にいろいろな質問をしていた。エリザベスが梓の横でそれを聞いていて、時々話に加わっていた。賢と父の健太郎は店の中にあるレッドウッドの椅子に座って、話をしていた。父はこの日の午前中は非番に代わってもらったと言った。回診は午後からとのことだった。昼食は健太郎が全員をメキシカン料理の店に接待した。タンドリーチキンとアボガドのうまい店だと、健太郎は嬉しそうに言った。エリザベスが、「お客様が見えると、よくここに案内するの」と言った。

ストックホルム

賢たちがストックホルムの空港に着いたのは午後2時頃だった。乗降口を抜けると5人は肌寒さを感じた。ストックホルムは雨だった。東領製作所ストックホルム支社の支社長浮島が出迎えに来ていた。

「皆様、ようこそストックホルムまでお越しくださいました。亜希子お

嬢様、お疲れになりましたでしょう。お嬢様にはスイートルームを予約させて頂いております。一旦ホテルにお入りになって、ご休憩いただいたあと、わたくしは一旦支社に戻ります。そして夕方また伺います。それから山上のレストランにご案内いたします。そこからはお食事をなさりながらストックホルムの町を一望の元にご覧いただけます。お嬢様がお寛ぎいただけるように特別席を予約してあります。今日は生憎の天候ですが、雨が上がれば、途中で野外ダンス場でのダンスをご覧いただけるかも知れません。ここは自由恋愛の国ですから、男女の交際も盛んです。もしよろしければ、そちらにもご案内したいと思います」

浮島の運転するリムジンカーに全員が乗り込み、走り始めると直ぐ亜希子が言った。

「支社長さん、わたくしだけを特別扱いなさらないでくださいね。この旅行はこちらの内観さんがリーダーの出張ですよ。わたくしは内観さんに同行させていただいているだけですから」

「はい、存じ上げております。できるだけ、お嬢様のご希望に沿うように計らせていただきます」

「そんなに気をお使いにならないでいただきたいのですわ。そうしていただかないと、わたくし、これから皆さんとご一緒させていただけなくなってしまいますもの」

「はい、でも、社長直接電話を下さり、お嬢様をくれぐれも頼むとおっしゃっておられましたので、わたくしとしても最善を尽くさせていただきますと・・・」

「それが困るのです。もし、どうしてもわたくしだけ特別扱いにされるのでしたら、わたくしはこれから皆さんとお別れして、一人で別行動をとらせていただきます」

浮島は慌てたようだった。

「そ、そんなことをおっしゃらないでください。わたくしは困ってしまいます」

「それじゃ、普通にして頂けますわね」

ホテルに着くと、浮島がまとめてチェックインをすると言ってフロント

に向かった。賢たちはロビーのソファで待った。浮島はスイートルームの予約取り消しと、別の部屋の確保をするためにフロントと掛け合っていたが、ホテルには普通の部屋の空きは無いとのことで、どうしても亜希子にスイートルームに泊まって欲しいと、頼みに戻って来た。亜希子は、「それなら、わたくしは、翌朝一人で発ちますわ」と言って譲らなかった。賢が仕方なく、仲裁に入り、亜希子の代わりに自分がスイートルームに泊まることにした。亜希子はやっと納まった。ベルボーイに荷物を渡すと、浮島はほうほうの体で戻って行った。賢が部屋に入ると、個室2部屋とリビングのような造りになっていた。部屋の奥にキングサイズのベッドが置かれていて、天井からベッド飾りが吊り下げられている。ソファやチェストなどの調度品もバロック調の高級品を使っていた。壁にはカンディンスキーの作品のレプリカと思われる絵が掛けてある。ベッドのサイドにある窓からは湖が望めた。別の部屋は書斎のようになっていて、奥に両袖のデスクと、金色の調度品が置かれている。もう一つの部屋にはダブルサイズのベッドがあり、ドレッサーも置かれていて、そこでも休めるようになっていた。浴室はダブルベッドの部屋の隣にあり、そこから透きガラスで浴室内が見えるようになっていた。その透きガラスを通して浴室からベッドルームにある40インチほどのテレビが見える。賢はバルキャプテンがスーツケースを持って来て、荷物台の上に置いて行くと、直ぐにキングサイズのベッドに身を投げ出した。そのベッドはウォーターベッドだった。水に浮いているようで、安定感が無く、すこぶる寝心地が悪い。しかし、波に揺られているような感覚を覚えて、深く呼吸をしていると何時しか寝入ってしまった。電話の音で眼を開けた。賢は眠りに落ちてても、常に意識は覚めていたので、およそ1時間ほどしか経過していないことは分かっていた。

「Hello! Ken speaking.」(もしもし賢ですが)

「賢さん、大変です。亜希子さんの応答が無いんです」

梓からだった。

「わたくし、さっきからずっと電話しているのですが、全然応答が無いんです」

「今すぐに5階に行くよ。亜希子の部屋も確か5階だったよね。じゃあ、亜希子の部屋の前で」

賢は直ぐに亜希子の部屋に向かった。梓が部屋のドアをノックしていた。応答は無い。賢もノックしてみた。やはり応答は無かった。梓が言った。

「応答無いでしょう。わたくし、3度ほど来たんです。ロビーにも行ってみました。ホテルの外にも出てみました。でも姿はありませんでした。心配です」

「一旦僕の部屋に来て、そこで対策を検討しよう」

二人は亜希子を探す手段を相談しながら、7階の賢の部屋に向かった。兎に角、先ず、賢が透視を行ってみることにした。二人が賢の部屋に入ると、亜希子が事務機の置いてある部屋から出て来た。

「亜希子、どうしたんだ。君を探していたんだよ」

「賢さん、わたくし、またテレポーションしてしまいました。暫くの間、意識が混沌としていて、定まらなくて、このままじゃ危険だと思ったので、賢さんの部屋に行って相談しようと思っていました。そしたら、ポーっとしてきて、ここに来ていたのです」

梓は呆然としていたが、眼をしばたせて言った。

「それじゃ、2時間以上も意識が定まらない状態でいたのかしら？」

「今、何時ですか？」

「もう、6時近いわ。あと30分もすると浮島さんが来るわ」

「亜希子、意識が安定するまで、少し休むといいよ。その横の部屋にベッドがあるから、そこで休むといい。亜希子はここに居たほうが、安全なようだな」

「さきほど、支店長さんと、言い争いをしていたとき、自分の話していることが現実化しそうな気がしてきて、危ないと思いました。でも、あなたに意識を向ければ大丈夫という確信がありましたから、それほど不安ではありませんでした」

亜希子がダブルベッドのある部屋に入ってゆくと、梓は一旦自分の部屋に戻ると言って出て行った。賢は暫く瞑想することにした。やがて、意識は真っ暗な、空間も時間も無いような領域に入っていった。自分がど

んどん深い闇の底に落ちて行くような感覚がする。賢には恐怖心は無かった。ただその落ちてゆくスピードが次第に加速されてゆくような気がした。それは落ちてゆくのではなく、小さくなっていつているのだと気が付いた。もう自分という存在が消えてゆくの分かる。不思議なことに自分が無くなってゆくの重量が無限に増大してゆく。更に、更に加速は続き、もう自分自身の意識が見えなくなり、全てが押しつぶされたような状態になった。真っ暗で何も無い状態だった。巨大な重量があるのに何も存在していないという、不可解な状態にあることだけが分かった。その何も無い状態の中で、賢は一瞬、存在したいと思った。その瞬間に自分の意識が揺れたのが分かった。そこから、時の流れを感じるようになった。自分の意識の動きが時間を作り出したのだ。それは同時に振動の存在する場をも作り出した。それが空間だった。その揺れは何も無い状態に歪を作り、正と負の間の振動を引き起こした。その振動は初めはゆっくりとしたものだったが、次第に加速していった。その正と負の状態の中にもまた振動が起きてきた。正と負に分かれた全く同じ振動が無限に広がってゆく、振動がだんだん高まってゆくとそこに、音が聞こえた。その音は正にも負にも響き渡った。それは賢の意識そのものが発している音だった。やがて更に振動が高くなるとその音は消え、今度は光が輝いてきた。振動は更に高まり、無限に分散して、無数の小さな振動を生み出していった。それは無数の輝く光を生み出した。目が眩むような美しい輝きだった。そこには燃え上がる振動があった。火だった。全ての振動は高まり、激しくなり、終に、流動するものが現れた。水だった。又別の振動する状態が高まり、気体が生まれた。それが動いた。風だった。振動は更に高まり粒子状の物質を作り出した。それは土だった。時間がものすごい勢いで流れ、微生物の存在する時を経た。水生生物の存在する時を経た。植物の繁茂する時を経た。魚類の生息する時を経て、両生類の存在する時を経て、哺乳類の存在する時を経た。賢は自分の意思で自分を存在させた。その時を凝視した。それから、自分が何回も、正の領域と負の領域を行ったり来たりする経過を見ていた。賢はふと気がついた。時の流れと思ったものは、流れではなくて状態だった。

自分が意識するとその状態が現れた。様々な場所で様々な状態が現れていた。そして、それら全ての状態は自分自身から出たもので、自分自身の一部だった。もう一つ重要なことに気付いた。自分が意識するとその状態に影響を与えることが分かった。しかし、それも当たり前のことだった。自分自身なので、自分の思うとおりに動かすことが出来たのだ。まるで指を動かすように、世界を動かすことができた。そして、このような状態を認識している自分に気付いたということは、同時に自分がこの一つの展開を収束させる段階にいるということの意味しているということでもあった。無限に展開している植物、動物、全てを包含する自然界、これらも全て自分の一部であった。賢は様々な生き物に意識を移してみた。それらの動きは自分の動きであり、自分の意思による行為の結果であった。植物に意識を移してみた。植物は地から基本振動を受け、空中からエネルギーを受けて、成長を続けていた。それらは自分から派生した枝葉であった。賢は最後に人間達を見た。人間達は皆、自由意志を持って生きているように見えた。しかし、賢が凝視すると、それはまさしく自分自身の姿だった。いろいろな面を表現している姿だった。少なくとも肉体や思考はそのように働いていた。意識だけは不変だった。人々の意識は正の世界では負の姿を写し、負の世界では正の姿を写したものであることが分かった。正と負は一つの空間に重なっていて、別の場に存在していた。それらは全て振動だった。無限に展開された振動だった。大抵の人間の機能はほとんど動物と同じ部分しか働いていなかった。人間にはその数十倍の能力が埋め込まれていることが分かった。それは自分が埋め込んだものだった。その埋め込まれた機能も含めて、それぞれの人間が自分という人間を日々作り続けていた。最近の人間達は、その仕事を忘れ去っている。自分の周りの居住環境を良くすることにのみ意識が向いていて、ほとんどの機能を磨くことを忘れ去っているようだった。それは賢自身でもあった。賢は、この世界の動きを瞬間に全て捉え、変えることができることを認識した。あまりの素晴らしさに、涙が流れた。正の世界の人々を見ていると一人の金色の輝きを発している美しい人が浮かび上がって見えた。それが祐子であることが分かった。

賢は意識を負の世界に向けてみた。そこには青紫色に煌めく一人の貴婦人のような人の姿が浮かび上がってきた。亜希子だった。賢は正と負の両方を同時に観察してみた。それが世界だった。それは今まで自分が見てきたような世界ではなかった。全ての時間と全ての空間と全ての存在を同時に見ることができた。この世界の時間は、宇宙のリズムに同調して存在していることが分かった。その宇宙の構造そのものは、自分の意識が作り出した振動を写す空間そのものだった。そして、意識を動かすと、その状態が眼前に展開した。賢は「これが本当の世界だ」と叫んだ。全ては自分自身から生み出された振動だった。そして、全ては自分の意識を写した写像だった。賢は感動に打ち震えた。

そのとき電話のベルが鳴った。賢は静かに瞑想を解いた。ゆっくり眼を開くと、そっと受話器を上げた。

「もしもし、内観さんですか？浮島です。そろそろそちらに行ってもよいかどうかお聞きしたくて・・・あの、つかぬ事をお聞きしますが、亜希子お嬢様はどちらにいらっしゃるかご存知ありませんか？」

「はい、僕のところにいらっしゃいますよ。今お休みになっていますが」「そうですか。少しお嬢様に替っていただくわけにはいかないでしょうかね・・・」

「かまいませんが、起こしますか？」

「・・・それとなく、そっと起こしていただけますか？ビックリしないように」

「わかりました」

賢は受話器を横に置いて、亜希子の休んでいる部屋のドアをノックした。

「はい、どうぞ」

亜希子は直ぐに応答した。起きているようだと賢は思った。扉を開くと亜希子はベッドの縁に腰掛けていた。

「浮島さんから電話だよ、そっちで取って」

亜希子が受話器を上げたので、賢はベッドサイドに帰り、受話器を戻した。

「お嬢様、これからお伺いしてもよろしいでしょうか？お部屋にいらっ

しやらなかつたので、心配致しました。何か変わったことはございませんでしたでしょうか？わたくしにできることがありましたら、何なりとお申し付けください」

「浮島さん、さっきも申し上げたように、これ以上わたくしを特別扱いはされるのでしたら、わたくしは本当に消えてしまいますわよ」

「は、はい、申し訳ありませんでした。ご心配申し上げておりましたもので……」

「わかつたわ。わたくしにさせていただいたように、他の方々にも連絡してくださいね。わたくしはフロントに下りて待っていますから」

「はい、分かりました。申し訳ありませんでした」

全員がフロントに集合して、浮島を待った。女性達は長袖のシャツにショールを掛けていた。二人の男性は背広姿で、賢はダークブルーのシャツにブレザーを着ている。雨は上がっていた。10分ほどして、浮島がリムジンカーをホテルに横付けした。浮島は全部のドアを開け、全員が乗り込むのを待った。賢が最後に乗ろうとしたとき、浮島が賢をそっと後方に引っ張って小声で聞いた。

「お嬢様のご機嫌が悪いようですが、何かありましたか？」

「いいえ、別に」

「わたくしのことを嫌っているのかもしれませんが、レストランなどで、お嬢様の一番気に入るように、お取り計らいいただけませんか？」
賢はくすくすと笑って言った。

「浮島さん、亜希子さんはそれを嫌っているみたいですよ」

「でも、社長にくれぐれもと言われましたので」

「分かりました。亜希子さんの好きなようにします。これでいいですね」

「助かります。よろしく願いいたします」

10分ほどで、山上のレストランに着いた。予約は7時にしてあったので、15分以上時間があつた。浮島がラウンジで待とうと全員を連れて、バーに入った。バーにはインド人のような男性達5人のグループがテーブル席に着いてカクテルを飲んでいて、賢たちはその隣の大き目のテーブルに着いた。ウェイターが注文を聞きに来た。賢はビールを頼んだ。

賢の隣に座った浮島が賢の肘を突いた。亜希子の注文を聞けといわんばかりである。賢は4人に何か飲まないかと聞いた。小塚と長谷部もビールを頼んだ。亜希子と梓は何も要らないと言った。浮島がもう一度訊いた。

「女性のお二人も、何かお飲み物を如何ですか？」

二人とも「いりません」と言った。賢は苦笑いをした。賢が言った。

「浮島さん、二人とも飲めないんですよ」

ウェイターは隣の席のインド人に声を掛けられて、何か注文を受けた。そのインド人の話し声が聞こえてくる。英語なので、聞き取ることができる。

「*****」(君のとこの、別荘は大丈夫だったのか?)

「*****」(俺のところは、ジャイプールにあるから大丈夫だった。だが、君も大変だったな。まさかカルカッタが狙われるとはな)

「*****」(お客さんには、御礼をしたのか?)

「*****」(いや、まだどこにいるか見当がつかない。東の果ての島国らしいがな)

「*****」(見つけたら、消えていただくのか?)

「*****」(我々の国の男が、案内したようだ。案内係の人たちにはもう消えていただいた。しかし、誰もやられなかったからな。もし見つけたら、東の島の人には車椅子をプレゼントする程度でいいだろう) 賢には長谷部と小塚の席の間から、話しているインド人の男の顔が時々伺えた。太った男だった。見覚えがあった。賢がその男のことを思い出したとき、ウェイターがトレイにビールやカクテルなどを載せて持って来た。ビールとタンブラーを男性たちの前に置くと、二つのマルガリータを亜希子と梓の前に置いて言った。

「*****」(このカクテルは後方におられるお客様からです)

亜希子と梓は振り返った。先ほど英語で妙な話をしていたひげの濃い、太った男がにこっと笑って、軽く手を挙げた。亜希子の背中に冷たいものが流れた。瞬間に亜希子は思い出していた。透視で見たインドのハーレムの主だった。亜希子は振り返ってウェイターに向かって言った。

「*****」(これはいただけません。二つともお返ししてください。
貰う由縁はありません)

「*****」(それは困ります)

「*****」(困るのはわたくしたちですわ。何の関係も無い人からカクテルなどいただけません。それにわたくし達はお酒は呑みません)ボーイは亜希子の剣幕に押されて、カクテルを持ち帰った。梓も拒否しようとしていたが、亜希子の言葉に相槌を打つのがやっとだった。ひげの男は両肩をちょっと上げて、残念というそぶりをした。ビールを飲み終える頃、ウェイターが席の準備が出来たと言いに来た。レストランは広いガラス張りの窓に向かって壇状に席を並べてあった。案内された席は一番上段中央の半円形の席で、レストランの中全体も、窓の外の景色も一望の元に眺めることができた。賢は先ず、亜希子と梓に最も見晴らしのよい席に着くように言った。二人は嬉しそうにその席に座った。そして二人の女性の横にふたりの男性を座らせ、賢と浮島は両端に座った。賢たちの席の隣の席に、先ほどのインド人たちが着いた。インド人たちは席に着くと直ぐに先ほどの男が席を立て賢たちのところにやって来た。

「*****」(わたくしはインドの商社TUTU商事を経営しているブルドリキン・チュダンビランと申します。先ほどはいきなり大変失礼致しました。お詫びのしるしに、ここはわたくしどもに払わせてください)

浮島が腰を上げようとしたが、瞬間的に賢がそれを抑えるように睨み付けてから言った。

「*****」(わたくしどもは、何とも思っておりません。もう、あのことは忘れてください。そして、ここはわたくしたちの思い出にする場所ですので、お申し出はありがたいですが、お受けできません)

「*****」(そうですか。それは残念です。日本の会社の方々とお見受けしましたが、わたくしどもの商社も日本の企業とは沢山の取引がありまして、この機会に是非お見知りおきいただきたいと思います)そう言うとブルドリキンは名刺を出した。賢は名刺は持ち合わせていな

いと言って謝った。しかし、浮島が立ち上がると、ポケットから札入れを出し、1枚の名刺を取り出してブルドリキンに渡した。ブルドリキンは頷いて言った。

「*****」(良く存じ上げております。御社はわたくしどもとの取引も沢山ございます。今後ともよろしくお願いいたします)

浮島とブルドリキンが握手をした。ブルドリキンは賢のほうに手を出そうとしたが、賢は視線をそらせて、暗黙の内に拒否する反応を示した。小塚と長谷部が背広のポケットに手を持っていったが、梓がそれを制した。ブルドリキンはばつが悪くなって、浮島の方に軽く頭を下げて自分達の席に戻って行った。浮島が小声で賢を責めるように言った。

「*****」(どうしたのですか？ビジネスのチャンスじゃないですか)

賢はそれには応えずに、ただ、軽く頷いただけだった。

目に映るストックホルムの景色は、まるで水中に浮んででもいるかのようで、北欧独特の雰囲気をかもし出していて、心にじわりじわりとしみ込んでくる。小塚と長谷部は饒舌になって、自分達の仕事の成果を話していた。梓もこのときは大目に見ていた。亜希子と賢はあまり喋らなかった。浮島が亜希子に気を使っている様子がよく分かった。亜希子がソースを取ろうとしたときには自分が立ち上がって手を伸ばして取って、亜希子に渡したり、亜希子のパンの受け皿のバターが終わりそうになると、直ぐにウェイターを呼んでバターの追加を頼んだりした。陽が傾き、次第に夕空に夜の帳が降りてくると、ストックホルムの町は美しい薄紫のベールを背景に、明かりの灯った黒ずんだ建物を浮き上がらせて見せてくれた。賢たちは8時半頃席を立った。隣のインド人のグループはまだ食事中だった。ワインのボトルを3本ほど並べ、テーブルの上はグラスだらけだった。席を離れてインド人のテーブルの前を通り過ぎるとき浮島は軽く会釈をし、手を挙げて通り過ぎた。ブルドリキンもそれに応えた。賢たちは少し頭を下げて通り過ぎた。車に乗ると浮島が言った。

「内観さん、どうして、名刺交換しなかったんですか？」

賢は

「いえ、ちょっと」

と言っただけだった。浮島はそれ以上言わなかった。山を下ってゆくと、途中で広場のような場所を照らすスポットライトが点いていて、そこには大勢の男女がたむろしていた。浮島が車を駐車場に停めて言った。

「ここはスウェーデンの典型的な社交場です。ちょっと寄ってゆきますか？あの奥の建物の中はレストランとダンス場になっています。」

賢は先ほどのインド人のことが頭から離れない。嫌な予感がした。できるだけ早く彼らから遠ざかりたかった。賢が言った。

「今日は、少し資料をまとめたいので、早目に宿に帰りたいと思います」小塚が言った。

「若者が一杯いますね。どんな風に交流しているのか知るのも、学びになると思うのですが、リーダーいかがでしょう？」

梓が言った。

「リーダー、折角ですから、少しだけ見学してゆきましょう」

賢は同意せざるを得なかった。二人の男性と梓はフォークダンスの周りを取り囲んでいる若者の所に行き、話し掛けた。二人の男性は、女性達が3人で居るところに行き、話し掛けている。賢と亜希子は少し離れてそれを見ていた。浮島は亜希子のことが気になるようだったが、時々後ろを見ながらも梓を追って、若者達の所に進んで行った。辺りに誰も居ないことを確認して亜希子が言った。

「あなた、あの浅黒いひげは、たしかに・・・」

賢がそれを押し留めるように言った。

「今は、何も言うな。ほんの僅かでも覚られたらまずい」

賢は4人に早く戻って来てほしかった。しかしその意思は通じなかった。梓は人ごみの中にまで進んでゆき、小塚と長谷部はフォークダンスに加わってしまった。浮島は暫く3人を見ていたが、亜希子の所に戻って来て言った。

「お嬢様、立って見ているのも何ですから、中のレストランでコーヒーでもお飲みになりませんか？」

賢も外より中のほうが安全だと考えた。外からは中の様子は伺えない。

建物の中に入ると、入り口から直ぐに二手に分かれていて、左手がレストラン、右手にダンスホールがあった。ダンスホールには大勢の中高年の男女がダンスを踊っている。賢は浮島に、「外に居る3人に、我々の中に居るので、戻って来るように伝えてください」と頼んだ。案内された窓際の席に着いて外を伺うと、若者達の姿がはっきりと伺えた。どうやらガラスがマジックミラーになっているようだった。浮島が若者達がいる方向に向かって歩いてゆく。賢はふと、駐車場の方から歩いて来る人影に気付いた。スポットライトの光を受けると、あのインド人たちのグループであることがはっきり分かった。このレストランの方向に向かって歩いて来る。ブルドリキンと思しき男が手を挙げた。浮島も気付いたようで、手を挙げてそれに応えた。浮島は男達に近づくと、そこで立ち話を始め、5分間ほど話し込んでいた。浮島がレストランの方を指差した。ブルドリキン達はレストランに向かってそのまま歩いて来る。浮島は3人を探しに人ごみの中に入って行った。賢が亜希子に言った。

「いいか、ニコニコしているよ。僕が話をするから、一切口を出すなよ」

「はい」

ウェイターがコーヒーを持って来た。ウェイターが戻ってゆくと、入れ替わりにインド人たちが入って来た。ブルドリキンが案内係のウェイターに、賢たちの居るテーブルの方を指差して何か話した。ウェイターが賢たちの隣の席にインド人たちを案内して来た。ブルドリキンが会釈をした。賢と亜希子も会釈を返した。他のインド人たちもほんの僅かに会釈をしたように賢には感じられた。

「*****」(又会いましたね。奇遇ですね)

「*****」(こちらにはビジネスでいらっしゃったのですか?)

「*****」(いいえ、避暑を兼ねた観光です。イギリスに行く途中で、ちょっと寄ったんです)

「*****」(そうですか。気をつけて、楽しい旅行をなさってください)

「*****」(ありがとうございます。あなた方はどうしてこちらに?)

「*****」(会社の業務の一環で来ています)

「*****」(まるで観光旅行のようですね。綺麗なお嬢様をお連れですし)

「*****」(彼女達は会社の人間ですよ。それでは、お気をつけて) 浮島が戻って来た。賢はできるだけ早くここを出たかった。浮島がインド人の方に頭を下げて、席に着くか着かないうちに賢は言った。

「彼らはどうしましたか？」

「直ぐに来ると言っていました」

亜希子が言った。

「支社長、わたくし達はまとめをしなくてはならないのです。どうして彼らを連れて来てくださらないのですか？」

浮島は「すみませんでした」と言うと、慌てて、もう一度レストランから出て行った。浮島が出てゆくと、ブルドリキンがわざわざ席を立てて亜希子の前に来た。

「*****」(どちらのホテルにお泊りですか？)

「*****」(どうして、お聞きになるのですか？)

「*****」(いえ、同じホテルなら、朝食なども一緒できるかと・・・)

「*****」(すみません、わたくしたちはビジネスでの宿泊場所は社外の方にお教えしないことになっておりますので・・・)

「*****」(それは、失礼致しました。よいご旅行をなさってください)

ブルドリキンは漸く引き下がった。直ぐに浮島が3人を連れて戻って来た。

「リーダー、時間をとってしまって申し訳ありませんでした。でも、いろいろな情報を得ることができました。スウェーデンの人たちのコミュニケーション方法が少し理解できたように感じました」

「そうか、それは良かった。じゃ、直ぐにホテルに戻ろう」

賢が言うと、浮島が怪訝そうな顔をして言った。

「随分お急ぎなんですね」

賢はそれには応えず、直ぐにウェイターを呼んで、チェックを頼んだ。支払いが済むと、賢は全員を促して、そそくさとレストランを出た。イ

インド人の横を通るとき、軽く会釈をした。ブルドリキンは右手を少し上げて、会釈を返した。車に乗ると浮島が再度質問した。

「どうかなさったのですか？」

「詳しい話は出来ないけど、あのインド人たちは危険なんだ。だから出来るだけ早くあの場所を出たかった」

「わたくしも、危ないと感じましたわ」

浮島は、非常に慌てた。自分に不適切な行動があったと感じたようだった。しきりにくびを左右に動かして後ろを窺ったり、左右の状況を見たりしながら運転した。梓が言った。

「リーダー、申し訳ありませんでした。気が付きませんでした」

「いや、何か合図を送ればよかったんだけど、思いつかなかった。でも、何事も起きなくて良かった」

「僕たちも、気付かずに勝手な行動をしてしまい、申し訳ありませんでした。また、ご迷惑をおかけしてしまいました……」

「今度は、変に接近して来る者のことは、特に気をつけてください」

賢の言葉に浮島が質問するように言った。

「どのように、危険だったんですか？」

賢が単刀直入に応えた。

「例えば、命を狙われるとかというレベルです」

「そ、それは、一体どうしてですか？」

「社長のもう一人のお嬢様、祐子さんが拉致されたことはご存知でしょう。あるインド人がその犯罪に絡んでいると思われるのです。僕と亜希子さん、梓さんはお嬢様の捜索にインドにも行き、捜索しました。ですから、狙われる可能性があるのです。僕たちが最近、インドに行ったことがあるということが知れると危ないんです」

「あ、あ、あの、わ、わたくしは、さっき公園で……ブルドリキンさんに、その話を……してしまいました」

「えっ？本当ですか？まさか、ホテルの名前とか、移動のフライトの話はしていないでしょうね」

「しつこく聞かれましたが、ホテルの名前は、社の規則がありますから、

言いませんでした。勿論フライトのことも言っていません。あっ、そう
だ、何時発つかと聞かれたとき、3日後だと言ってしまいました」

「そうですか。それじゃ、明日中に調査を終え、明後日できるだけ早く、
ここを発ちましょう。田辺さん、フライトの変更をしてください」

「はい、リーダー、わたくしたちが、勝手な行動を取ったためにこんな
ことになって……申し訳ありませんでした」

「まだ、何も起きていないから、今後は可能な限り、リスクを回避して
行動しよう」

ホテルに戻る途中で、浮島が言った。

「どうも、追跡（つけ）られているようです。少し廻り道をして、撒き
ますので、到着が少し遅くなってしまいますが……」

「やはり、追跡られていますか。遅くなるのは、全然構いません。レポ
ートをまとめると言ったのは、あそこから早く逃れるための口実ですか
ら」

浮島はスピードを上げた。暫く行くと、狭い路地に入った。一方通行の
道と交わる2番目の交差点を右折し、続いて5つ目の交差点を左折し更
に、3番目の交差点を右折し、次の交差点を右折した。車は出たときと
は逆の方向からホテルに着いた。

「ここまでは、追って来られないと思います」

「浮島さん、今日はここで引き返してください。そして、明日はこの車
も避けたいので、別の車で来てください。我々もタクシーを呼びますか
ら、あなたの車とタクシーの2台で……」

「いえ、大丈夫です。6人乗れる大型車で来ます。予定通り、朝8時で
よろしいでしょうか？」

「そうしていただければ、助かります」

浮島は、賢の近くに寄ると小声で、亜希子のことをよろしく頼むと言っ
て車に乗り、帰って行った。部屋に戻ると賢は亜希子と梓を自分の部屋
に呼んだ。梓はまた、自分の不行き届きを詫びたが、賢は、

「ぼくと、亜希子さんは透視を使ってあの男を見たことがあるんです。
だから直ぐにわかったんです。あなたに非はありません。だけど、もし

あのインド人が、事前に僕らがここに来ることを知っていたとしたら、危険きわまりありません。あの男達がここに居ることが、偶然にしてはあまりに出来すぎていると思いませんか？」

と言った。梓は漸くことの重大さに気付いたようだった。

「でも、リーダー、レストランのバーで彼らは英語で話していたでしょう。もし、リーダーの推察が当たっているとしたら、何故、わざわざ自分達の存在を明かすような真似をしたのでしょうか？ヒンズー語とかタミル語とかインドの言葉で話せばわたくしたちに怪しまれる心配は無かったと思うんですが……」

「うん、それもそうだね。まあ、偶然顔を合わせたのならいいだけだね。いずれにしても、細心の注意をしよう。梓、疲れているところを済まないけど、全員のフライトをチェンジしてくれないか？」

「やはり、香川さんのところに向かいますか？」

「うん、もし出来たら、経由地が増えてもいいから、彼の所に寄って、その後で、ルワンダに向かいたい」

亜希子の顔が嬉々とした。

「本当ですか？うれしい！」

「小塚君と長谷部君のビザが無いだろう。彼らには、デンマークとフィンランドを調べてもらおう。メールを通して連絡し合って、次の目的地インドのデリーで会うことにしたらどうだろう」

「デリーは大丈夫でしょうか？」

「ブリクロンさんと連絡を取って、確認してから行こう」

「わかりました。それではナイロビで少し時間を過ごし、そのまま直ぐにルワンダに向かうように航空券を手配します」

「僕は、小塚君と長谷部君に話しをしておくよ」

賢は小塚と長谷部に電話を掛けた。二人は直ぐに賢の部屋に来た。亜希子が居ることに少し驚いたようだったが、賢から計画変更の話を聞いて、直ぐに納得した。男性二人のホテルの予約や調査の為のアポイントメントは全て支社にやってもらうことにした。

その夜、亜希子は自分の部屋には戻らなかった。賢は亜希子に部屋に戻

るように言ったが、亜希子はどうしてもここに居たいと言った。賢は受け入れざるを得なかった。

亜希子は翌朝5時に起き、部屋に戻って身支度を整えた。昨夜の余韻が身体に残っていた。

5人は食事を済ませてロビーのソファで浮島を待った。8時を過ぎても浮島は現れなかった。フロントの女性が賢の所に来て電話が掛かっていると聞いた。浮島からだった。

「おはようございます。連絡遅れて申し訳ありません。わたくしは昨夜帰り道で、狙撃を受けました。リムジンカーが、側方を通過する車から狙い撃ちされたようなのです。狙撃した車は昨日、ブルドリキン氏が乗っていた車ではありませんでした。幸い傷は負いみませんでした。今、警察が来て取調べを受けている最中なのです。警察はテロを疑っているようです。申し訳ありませんが、わたくしの代わりに者を向かわせますので、後15分ほど待っていただきたいと思います。お嬢様にもよろしくお伝えください」

宗地という浮島の部下が現れたのは8時20分過ぎだった。宗地は浮島の指示に従って来たと言った。10時に政府の人間と会う手筈が出来ているが、そのときに間に合えば浮島も出席するとのことだった。宗地はリムジンカーが運転席ではなく、客席の2列を狙って狙撃されていたと言った。幸い、防弾処理がされていたので、ガラスにひびが入っただけだった。宗地は夜だったことと、客席がカーテンで隠されていて、内部が見えなかったのも、中に人が居ると思ったのではないかと言った。所長は、お嬢様が無事であったので、胸を撫で下ろしていると、余計なことまで説明した。

政府の閣僚が非公式に会ってくれる事になったのは、浮島の努力の賜物だった。10時10分前に議員宿舎の駐車場に着いた。宗地はそこで5分ほど時間を潰してから、全員を引率して議員宿舎に入って行った。宗地が言った。

「ここは議員が常住している所ではなくて、政務に必要なときだけ、宿泊したり、休息したりする場所なんですよ」

受付でアポイントメントのことを話すと、会議室に案内された。会議室には黄土色のテーブルとブルーの椅子が並べられていて、日本の議員が使う会議室のような豪華さは無い。全員机の脇に立って待っていた。議員のスヴァンテ・アンデションは時間通りに現れた。英語で挨拶を交わすと、アンデションは全員に席に着くように促した。全員が座ると同時に、先ほどの受付嬢がコーヒーを持って部屋に入って来た。アンデションは先ず、賢に対してどうしてスウェーデンに調査に来たのかを質問した。賢は応えた。

「*****」(日本人の心が物質主義偏重になって来て、社会的にも失業者が溢れ、格差の拡大が起きているため、日本人の意識の改革を図る計画があり、その前段として、素晴らしい改革を実現している国を訪れて、その意見を伺い、実態を調べたいのです)

アンデションは訪問の意図をよく理解できないようだったが、「この国の現状を説明する」と言うてから、単刀直入に行政について具体的な解説をし始めた。

「*****」(遠いところを、はるばるスウェーデンまでお越しになり、大変でしたね。スウェーデンの政治や行政のことは既にお調べになってご存知でしょうが、もう一度主なこととお話しましょう。この国は他国が揶揄するような、国民が負えないほどの大きな負担になる課税を課している国ではありません。確かに国民の支払う所得に対する税率は他国に比べて大きな数字なのですが、それはほとんど国民に戻っているのです。だから、負担が大きくて貧しい国ではなく、国民は何の不安も無く生きることのできる、生活が豊かな福祉国家なのです。医療費は20歳まで入院費も含めて全て無料ですし、学費は大学まで無料、もっとも頭がよければの話ですが・・・)

それを聞いて全員笑った。その場の雰囲気が和やかになった。

「*****」(育児休暇もあるんですよ。日本にもありますか？女性は勿論、男性にもあるんですよ。男性が育児休暇を取るのは、普通のことです。スウェーデンがいろいろ苦しんだ結果生み出した解決策なのです。政府が目指したのは、先ず全ての人に働く意欲を持ってもらうこと

です。政治は働く人を後押しします。確かに貧富の差も生まれて来ていますが、それは皆、働いて努力したか否かの結果の表れなのです。ですから、皆さんは平日の真つ昼間にショッピングセンターや公園などで男の人が一人で子供と遊んでいたり、ベビーカーなどを押しているところに出会うはずですよ。わたくしは仕事で日本に出張したとき、そんな光景には出会いませんでした。日本の男性は、皆さん背広を着てビジネスバッグを手にし、怖い顔をして通りを歩いていました。わたくしたちの国は福祉国家だと、自信を持って言えます。勿論、いろいろな問題を抱えてはいますが、それは人間が活着ている限り、どこにでもある問題です。わたくしたちの国には社会全体に透明性があります。ご存知ですか？国会議員は普通のサラリーマンと同じなんですよ。年収はサラリーマンとほとんど変わりません。特典的なことは、すべて業務にリンクしていて、業務であれば、どんな高級なホテルに宿泊しても問題ありませんし、飛行機の代金も只です。だから、政治家は活動し安いのです。給料がサラリーマンと変わりませんから、本当に政治を行いたい者しか、政治家になろうとしません。偉くなろうとか、金を増やそうとか、権力を強めようとする政治家はほとんどいません。選挙の投票が政党に対して行われるからと謂うこともあります。まあ、中には欲のある者も居ますけどね。それはどこの世界にも居るでしょう？)

全員頷いた。賢が聞いた。

「****」(とても住みやすい国を造られているのですね。一足飛びにこれまでに成れたとは思えないのですが、こういう国に成れたきっかけは何ですか？)

「****」(積極的労働市場政策 (Active Labor Market Policy) をとったのがきっかけでしょう。だから、ワークフェア (Workfare) と呼ばれる就労政策が生まれてきたのです。政府は常に、どのようにして、人々を就労させるか、就労意欲を持たせるかに注力してきたのです。わが国の社会保障制度のほとんどが市場原理の枠を超えて、国民の所得と生活を安定的に守り、その上、国民の労働市場への参加を促しているのです。労働政策を中心に「就労すること」を主軸とした社会保障制度

つまり社会保険制度を構築しているのです。他国と異なり特徴的なので、スウェーデンモデルと呼ばれています。就労と社会保障を結び付ける考え方は「ワークライン(Work line)」という規範に基づいています。その条件のあるすべての男女が働き、スウェーデンという福祉国家を支えること、他方で福祉国家は、教育、育児や介護のサービス、職業訓練などの社会サービスを提供していますし、また必要な所得保障をおこなって、人々が労働市場に参加することを支援しているのです)

ここで、アンデションはコーヒーを啜り、亜希子と梓に会釈をして話を続けた。

「****」(わが国の社会保障制度は、失業者に対して受動的に所得を保障するものではありません。試行錯誤の結果、このワークラインという考え方に基づいて、職業訓練や教育を提供し、訓練を受けた者を労働市場に戻すことを重点的に行うという政策を採ったのです。それがうまく機能してきて、それで、わが国は福祉国家を維持できているのです。ワークラインによって、結果的に社会保険の資格の取得やその受給額が、労働市場に参加することと密接に関連するようになったのです。女性の就業率は1980年以降、75%を超えるようになりました。それは、女性の出産や育児休業中の生活への安心感と職場復帰への意欲を支える社会保障制度があることが最も大きな理由でしょう。女性の妊娠から育児まで、段階に応じて支給額を調整するような細かなサービスを行っています。出産や育児休業時でも就労時の所得の8割を保証しています。つまりワークラインとは、労働市場における成果が社会保障に反映され、雇用を健全な水準で維持するために社会保障が準備される、という考え方なのです。就労こそがこの国の福祉システムを支える必要条件になってきたのです。ただし、このような政策だけでは、労働市場から脱落する層を取りこぼしてしまう傾向が強くなることが予想されましたから、我々はそれと同時に完全雇用政策を進め、社会保障制度の枠から脱落するものを無くすように最大限の努力を図っています)

梓が拍手をした。賢は大きく頷いて言った。

「****」(大変素晴らしいです。この行政を国全体に浸透させる

のにどれほどの苦労があったか想像に余りますが、実際貴国の隅から隅まで浸透しているのでしょうか?)

アンデションはにっこり笑って言った。

「*****」(それは完全ということはありません。しかし、十分浸透していると確信しています。それはそうでしょう、将来の生活の為に、一生懸命働く、そして、その働いた結果が自分に帰ってくる。これほど安心できる仕組みは無いと思います)

初めは賢だけが質問していたが、アンデションは自由討議の時間にしようという提案をした。梓や亜希子が実際の生活における福祉と税金とのバランスに附いて、執拗に質問した。アンデションは露骨にスウェーデンを批判するような質問を受けても、嫌な顔一つせずに応えてくれた。小塚と長谷部は一言も口を挟まなかった。亜希子や梓が質問するたびに頷いて、合意の意思を示していた。5人は約束の12時まで、アンデションとの会話を満喫した。アンデションもスウェーデンの特質を日本人に理解させることに喜びを感じているようだった。

賢たちは12時10分過ぎに議員宿舎を辞して、途中昼食を摂りながら、郊外に向かった。1時半にスウェーデン人のサラリーマンと結婚した日本女性澄子を訪問する約束になっていた。賢は時々後方を伺い、尾行されていないかどうか確かめた。次第に建物が少なくなっていく。40分ほど木々と湖が続く道を走ると、宗地はハイウェイから右手に折れ、木々の間を抜けて、一軒の赤い屋根の家の前に出た。家は森林に囲まれていて、家の前に子供達の遊べる広い敷地が用意されている。そこに手作りと思われるブランコが一つあった。宗地はブランコの脇にある砂場の前に車を停めた。全員降りると宗地が先頭に立って家に近づき、ドアをノックした。45歳くらいの日本人と思しき女性が顔を覗かせた。

「いらっしやい、お待ちしておりました。いつもお世話になっています。さあ、中にお入りください」

宗地に附いて、賢たちは家の中に入った。室内は広々としていて、自然の木々がふんだんに使われている。新しい木を切った香りが心地よく鼻を刺激する。ソファも、テーブルも全て木製で、生の木を切り出して

作ったような家具である。壁には大きなペレットストーブが置かれていた。

「ここは、冬はとても寒いんです。窓も2重なんですよ。でも、夏は涼しいから助かります。皆さん大勢ですから、こちらのテーブルにいらしてください」

そう言いながら、女性は一旦奥に姿を消すと、直ぐに大きな盆にクッキーを盛った皿と紅茶のセットを載せて持って来た。カップに紅茶を注ぎ、一人一人に配って、クッキーの皿をテーブルの中央に置いた。

「今日は、無理な願いをお聞きいただいて、ありがとうございます。ご主人やお子様のご不在中にお伺いして、大変申し訳ありません。いつも当社の製品をご贖いいただいて、ありがとうございます。この冬のペレットストーブの具合はいかがでしたか？それと、液晶テレビの受信には問題ありませんか？」

宗地の営業トークに、婦人は微笑みながら応えた。

「ええ、今年はとても調子が良かったですわ。やはり、排気口の付け方だったのでしょうか。テレビもとても綺麗に映っていますよ」

「それはよかったです。当社の製品は、長年培った品質の基盤がありますから、最近伸びている新興企業の製品とは、一線を画すと思います」

「はい、信頼していますよ。ところで、先ず自己紹介からはじめましょうか？」

「失礼しました。それでは、端から順に自己紹介させていただきます」
宗地の合図で、賢から順に自己紹介をした。一行の自己紹介が終わると、婦人はにっこり微笑んだ。

「わたくしは、スミコ・ツングブルクと申します。日本の神戸に住んでいましたが、夫が日本に出張したときに巡り逢って、こちらに嫁いで参りました。2児の母です。日本からは直接来られたのですか？」
賢が応えた。

「アメリカのアリゾナを訪問してから参りました。こちらは涼しいですね。アリゾナは毎日40度を超える暑さでした」

「あっ、紅茶が冷めてしまいます。どうぞ遠慮なさないで。それと、

このクッキーはわたくしの手作りなんですけれど、よろしければどうぞお召し上がりください。アメリカに寄って来られた。そうですか、それは、大変でしたね。実は夫と子供達も今アメリカのフロリダに行っているのですよ。今年はわたくしが留守を預かることにしましたの」

「もしかして、我々の為に……？」

宗地が言った。

「はい、それもあります、実は弟夫婦がこちらに来ることになっているのです。夫は気を利かせて、「兄弟水入らずで」と申しまして……スウェーデンの生活に附いての感想をお聞きになりたいとおっしゃいましたわね？」

賢が応えた。

「はい、我々日本人は現在苦しい時代を生きています。国の負債が異常に拡大して、破綻が危惧されています。その上、東日本大震災や原発事故などもありましたし、失業率も増大し、年収の非常に低い人たちが増えて、若者が将来に希望を持ってなくなっているのです。それに対して、スウェーデンは世界で、その福祉国家としてのあり方が注目されています。午前中に政府のお役人のお話を伺ってきました。我々はこの国の政策に感心するばかりでしたが、実際に生活されている方々の感想も是非伺いたいと思ひまして、こうして伺わせていただきました」

「分かりました。日本の方々ですから、胸の内を包み隠さずにお話します。わたくしの率直な感想ですが、わたくし達は、いわば水族館の水槽の中に入れられた魚のような、生活を送っているような気がしています。そう感じるの、多分わたくしが日本で生まれて、大人になるまで日本で育ったためでしょう」

亜希子が言った。

「それは、どのような理由からなのでしょうか？女としてでしょうか？それとも人間としてでしょうか？」

「やはり、税金が高すぎるのです。わたくしは主婦です。家計をやりくりしなくてはなりません。消費税が25パーセントであることは何とかなるとしても、トータルで年収の40パーセント近い税金を支払うのは

負担が重過ぎるのです。勿論、学校は只、医療費も只ですから、その点は助かるのですが、一律に税負担をするわけでしょう。健康なわが家族は、税金を余計に負担しているような気がします。お子さんの居ない家庭も、多分そういう感覚を覚えていると思います。国全体の幸福、そして家庭の安全を買っていると思えばそれもいいのですが、自己裁量の余地がありません。だから、夫の給料だけでは生活できないのです。実を言うと、今度の旅行も、初めは家族全員で行く予定だったのですが、お金を使い過ぎると生活できなくなってしまうので、わたくしは我慢したのです。現在わたくしは職を持っていませんから、とっても厳しいのです。丁度弟達が来ると言ってきたり、あなた方が訪問してくれたので、本当は助かったのですよ」

賢が言った。

「でも、日本のように税金が何に使われたのか分からないわけじゃないでしょう。その点では、納得がゆくのではないですか？」

「ええ、確かに納得はゆきます。でもね、只、安全に生きればいいのかしら。わたしは子供の頃は男勝りと云われた性格だったんです。だから、少くらい危険があっても、ただ安全で変化のない道じゃなくて、強い満足感を得られる道を選びたかったのです。でも、この国では、それはかなり難しいです。結婚、出産、育児、子育て、就労、老後ともう生きる道が決まってしまうように感じるのです。そういう人生って、幸せですか？」

「ぼくは、幸せだと思います。国がやってくれていることは、経済的な面でのサポートでしょう。人間には心があります。経済的な面で、一応充足していると、生活についての苦しみのない、自由な発想ができると思います。……」

賢の言葉に応えるように梓が言った。

「リーダー、女の意識は、現在を生きることに重点が置かれています。そこがベースなのです。そこから全てが始まるのだと思います。だからスミコさんのおっしゃることは、女のわたくしには良く分かります。家計の中で、いつも、どうしたら家族が最も楽しく、健康に生きてゆける

かを、女は考えているのです。どうですかスミコさん？」

「はい、そのとおりです。政府は、女が家庭を守ることと、働くことの両立できる道を模索してくれていますが、まだ、わたしには満足のゆくものではありません。働かないと、生活してゆけませんから……それに、老後も保障されないでしょうし……」

賢が言った。

「女と男は基本的にその特質が異なります。男は働き、家を支え、道を切り開くことを課されていて、女は子供を生み、育て、家庭を守ることが課されていると思います。古いとお考えかもしれませんが、もし、今のように男女同権を標榜すると、男とは何なのかということになってしまいます。役割が交錯、転倒して、家庭の構造も崩壊してしまうと思うのです」

「そう、そうなのです。わたくしも今の政府にそれを言いたいのです。男にも、女にも、もう少し自由度を広げた選択肢を与えるべきだと思うのです」

長谷部が緊張しながら、言った。

「あの、僕の感想ですが……僕は学生の頃、頭の中はカオスの状態でした。今、おぼろげながらですが、生きる方向が見えてきました。でも、あのカオスの状態は最も大切な状態だったような気がします。何でもできると思っていました。あらゆるものに興味がありました。あらゆる可能性を意識していました。もし僕がこの国に居たら、僕はもっと、自由に発想できたと感じています。と言うのは、あの頃は常にお金のことを考えていました。お金が足りなかったのです。普通の生活をしていたのにです。そのほとんどが学費と部屋代に消えていました。もしこの国に居たら、もっと、生活に捕らわれずにいろいろな事を発想できたと思います」

スミコが言った。

「その点は確かにいいわね。だから、大人になるまではいいのよ。そこから老人になるまでの間が、働くことに集中しなければならない時期なの。それが一番問題ね。特に女性にとっては」

賢が言った。

「僕も同感です。どうやら、問題点は見えたようだけど、財政を考えると、政府の方針もやむをえないと思えてきてしまいますね。僕の友達に面白いことを言う人が居まして、かれは、「現在の経済のあり方はその根底がずれている。だからどこまで行っても満足できない。それは人間の意識にリンクしていないからだ」と言っているのです。今の国家ではその仕組みを作るのは難しいかもしれませんが、スウェーデンはかなり僕の友人の言っている社会に近いシステムを作り上げているような気がします。もう少し改善すれば、女性の就労に附いての考え方も改善されるように思います。やはり、スウェーデンという国は優秀ですね。兵器さえ作らなければいいのですが・・・」

スミコも2、3度軽く頷いた。

賢たちはスミコに礼を言うと、またストックホルムの方向に向かった。次に訪問するのは、高齢者の家だった。その家もやはり東領製作所のユーザーだった。30分ほど戻って、街に入る少し手前で別の道に入った。目的の家はその道の突き当たりにあるアパートの1階にあった。30歳前後の女性ルヴィーサ・ヘドルンドが、85歳になる父親と二人で生活していた。ルヴィーサは大学を卒業していて、家具製造会社の事務をしていた。まだ独身だった。父親は脚が不自由で自分ひとりで生活することは難しいようだった。彼女は父親を養護施設に入れるために、市に申請していたが、現在どの施設も満杯で、空室が無いとの理由で断られていた。支社は、ルヴィーサが英語を話せるので、訪問を依頼はしてみたが、彼女があまり気が進まないようなので、執拗な打診は控えていた。3日後に2度目の依頼を行ったときも、ルヴィーサは最初は否定的だった。しかし、謝礼を支払うと言うと、その日は休暇をとると言って、訪問を了承してくれた。彼女は純粋なスウェーデン人の両親の元に生まれた長女で、20歳のとき母親を亡くしていた。35歳になる兄が居たが、2年前にストックホルムから200キロも離れたイエーテボリに転勤になり、家族ともども引越してしまったため、ルヴィーサが父親の面倒を見ざるを得なくなってしまった。賢たちは、介護に支障が無いよ

うに配慮して、できるだけ短時間で訪問を終えようと考えていた。食卓のテーブルに着いて話を聞いているときに、奥の部屋からルヴィーサを呼ぶ声がした。彼女は「Excuse me」（失礼）と言って、席を立ち5分ほどして戻って来た。

「*****」（わたしが家に居るときは、ちょっとしたことでもわたしを呼ぶのです。きっと、寂しいんだと思います。わたしは近くに居るのにね。わたしも自分の将来のために働かなくてはならないのです。福祉のためですが、やはり嫌になってしまうこともあります。）

梓が聞いた。

「*****」（お父さんのことは、国が保護してくれないのですか？）

「*****」（そこまでは、面倒見られないようです。兄やわたしが元気で働いていますから、そういう面でも不利なんです）

「*****」（あなたは、この国の福祉政策について、どう思われますか？）

「*****」（経済的な面は、素晴らしいと思います。でも、心のケアまでは行き届いていません。だから、どうしても、どこかにそのしわ寄せが来てしまいます。わたしたちの国の自殺率が高いのも、心のケアが足りないからだと思います）

「*****」（あなたは、女性が働くことをどう思いますか？）

「*****」（女性に限らず、もっと自由に働くか、家に居るかが選択できる社会が望ましいと思います。わたしたちは籠の中の鳥です。もう、この福祉の仕組から抜け出すことができません。でも、籠の中も意外と安住できるものです）

賢は、「ごくみが大切だ」という原の言葉を思い出していた。現在の行き詰った仕組の中では、人間の意識を働かせることのできる場の提供が必要だと考えた。それがごくみ、即ち「次元を超える意識変革」に向かう道だと思った。

その後でまた父親が呼んだ。ルヴィーサは、嫌な顔もせずに父親の元に向かった。戻って来ると、ルヴィーサは父親が皆さんに会いたがっていると。賢、亜希子、梓の3人だけで、ルヴィーサの後に附いて奥

の部屋に向かった。父親はベッドに横になっていた。顔は皺だらけで、眼は白く濁っている。ベッド周りは綺麗になっていた。父親は賢たちに握手を求めた

「Hur gör man」(はじめまして)

ルヴィーサが通訳をした。3人は順に父親と握手をしながら、挨拶した。

「How do you do.」(はじめまして)

「*****」(父は、日本の皆さんに、福祉のことをお話したいと言っています)

「*****」(是非、お伺いしたいと申し上げます)

ルヴィーサが、そのことを父親に伝えると、父親は、ゆっくり頷いて、スウェーデン語でポツリポツリと話し始めた。父親が一呼吸置いたときに、ルヴィーサがそれを説明した。

「*****」(父は、「年老いて、神様に召されるのを待つ日々なので、わたしは生きることを助けてくれるより、如何に心穏やかにしていただけるか、それを支援してくれる福祉があればよいと思っている。福祉はいつも、介護をする側の見方で、勧められていて、わたしたち年老いた者の意見はあまり、取り入れられていない」そう申しております)

「*****」(そうなんですか。福祉の国スウェーデンでも、やはり、高齢者の立場に立った介護はなされていないんですね?)

梓が尋ねると、ルヴィーサが応えた。

「*****」(わたしもそう感じています。ですから、できるだけ父の気持ちを汲んで、世話しているつもりなのです。福祉施設でよく眼にする、幼児の頃の歌を歌ったり、演技をやったりするのは、本当は老人達にはどうでもいいことなんです。ただ、人と接していただけるので、嬉しいのです。そう、父もわたしに近くに居てほしいのです。わたしが居ないとだめなんです。だからわたしも父の世話をしている、とても嬉しいときもあります。でも、勿論、辛いときもあるのです)

父親の気持ちを、ルヴィーサが代弁していた。3人には、福祉を受けている老人達が身体の機能を維持することより、人との繋がりを求めていることが分かった。3人は再び父親と握手をして分かれた。

この日、最後まで浮島は現れなかった。賢たちは1時間ほどでルヴィーサの家を後にした。車に戻ると、賢の意識に戦慄が走った。賢は宗地に、この車が尾行される危険性があるので、うまく撒くような道を通ってホテルに戻るように頼んだ。宗地も了解していた。宗地のハンドルさばきは素早かった。賢たちには方角が全く分からなくなったが、15分ほどでホテルの前に車を着けてくれた。賢たちは、宗地にそのまま帰社するように言った。そして、できるだけ分からないような道を通るようにと忠告した。宗地は心得ているようだった。

幸いなことに、このホテルのことはインド人たちにまだ知られていないようだった。ホテルに入ると、賢の戦慄は消えた。6時前だった。5人はそのままホテルのレストランで夕食を済ませ、8時に賢の部屋に集まることにして、それぞれの部屋に戻った。賢がソファーに寄り掛かって寛いでいると、電話のベルが鳴った。

「浮島です。今日は申し訳ありませんでした。警察の調査が終えた後、日本の本社から電話があり、緊急に対応しなければならないことができてしまいましたので、そちらに何うことができませんでした。それと、わたくしが狙撃されたこともあり、今そちらに何うと、お嬢様方に危険が及ぶ可能性があると思ひ、宗地に行かせました。先ほど宗地から報告を受けました。今日はいまういってようですね。胸を撫で下ろしました。でも、宗地はへドルンドさんの家を出た所で、貴方が「追跡けられているようだ」と、おっしゃったと言っていました。そちらは大丈夫ですか？」

「ええ、今のところ大丈夫です。今回はいろいろご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ありませんでした。明日の朝、このホテルを出ますが、タクシーで行きますので、テイクケアはしていただかなくても大丈夫です」

「いいえ、そうは参りません。明日は自宅から、直接大型のバンで行きます。追跡けられないように、道を迂回して行きますので、安心してください」

賢は浮島の配慮に感謝した。

8時になると、全員が賢の部屋に集まって来た。梓が全員分のeチケットを持って来た。フロントに頼んで発券して貰ったと言った。小塚と

長谷部にはコペンハーゲン経由でヘルシンキ行きのチケットを渡した。二人は幾分緊張した面持ちで、チケットを受け取った。コペンハーゲンとヘルシンキには宗地が同行してくれることになった。賢たちの分は、ナイロビまでの発券はできていたが、その先はオープンのままだった。8時半発でパリを経由し、午後5時半着となっていた。3人は翌朝6時にチェックアウトすることにした。二人の男性は、11時の便だったので、食事を済ませて8時にチェックアウトすることになった。賢が二人の男性にコペンハーゲンとヘルシンキでの調査に附いて、指示をした。両国とも政府関係者のアポイントメントを取ることはできなかったが、宗地が市の行政部長と会う約束を取り付けていた。二人の男性にとって、海外での初めての仕事らしい仕事だった。二人は明日以降の計画を相談すると言って、自分達の部屋に戻った。亜希子と梓はもう暫く賢の部屋で話をしていたかった。これからどのように行動するのか、梓は不安だった。賢は、自分の意識がその行動を肯定しているのを知っていたので、不安は無かったが、ナイロビからの行程について具体的なイメージが掴めずに居た。亜希子のウキウキしている様子が、賢と梓にはどことなくしっくりこなかった。賢が亜希子に向かって言った。

「亜希子、いやに明るいな。何かいいことでもあったのか？」

「はい、わたくし、香川さんにお会いすることができますし、その後のことも、考えると胸が躍りますわ」

「祐子のことか？」

「はい、わたくしは、もしできるのであれば、このまま、アフリカに残って、祐子お姉さまのお手伝いをさせていただこうと思っています」

「やはり、そのつもりだったんだな」

「はい、わたくしは、このときを逃してしまったら、もう、2度と祐子お姉さまの元に行けないような気がしているのです。だから、賢さんも梓さんも、わたくしを止めないでいただきたいのです」

「亜希子、そんな危険なことは、多分、ご両親が猛反対すると思うぞ。親の反対を押し切って行くということは、それなりの覚悟が無ければならないんだよ。それでも、祐子の所に行くつもりなのか？もし、祐子が

受け入れることができなかつたら、どうするつもりだ？」

「それでも、わたくしは、アフリカに留まりたいのです。日本人とあまりにもかけ離れた人生を生きている人たちと共に生きてゆきたいのです」

「まあ、この話は、まだ時間があるから、ゆっくり相談しよう。明日が早いから、今日はもう休むことにしよう」

二人の女性は部屋に戻って行った。賢がシャワーを浴びて出て来ると、ソファに亜希子が座っていた。

「亜希子、どうしたんだ？」

「貴方にお話しておきたいことがあるのです。これをお話すれば、貴方もわたくしの気持ちが分かっていただけだと思うのです」

「分かった。少し待って・・・」

賢はバスローブの身づくろいを正して、亜希子の隣に腰掛けた。

「言っでごらん」

「はい。驚かないでくださいね。実は、わたくしと祐子お姉さまは実の姉妹なのです。わたくしも偶然そのことを知りました」

賢は驚いた。脳裏を様々な思いが駆け巡ったが、賢はその思考の流れを客観視していた。少しして賢は言った。

「年子ということか？」

「いいえ、2卵生の双子なのです。わたくしの本当の年齢は一つ上なのです。わたくしの誕生日は、祐子お姉さまの誕生日と同じなのです」

「じゃ、亜希子は崎野家の娘だったのか？」

「はい・・・でも、今はこれ以上は聞かないでいただきたいのです。父や母はわたくしがこのことを知ったことに気付いていません。わたくしは、まだ、自分を失わずに、これ以上のことをお話できるだけの自信がありません・・・」

「分かった。もう聞かない」

賢が亜希子の肩を抱き締めると、堪えていた涙が一気に溢れ出してきて、亜希子は、賢の胸で嗚咽を發して泣き崩れた。

「亜希子、分かったよ。君の思うとおりにするといいよ」

5分ほどして漸く亜希子は落ち着いてきた。亜希子が部屋に戻ってゆくと、賢は香川に電話を掛けた。香川は空港まで迎えに来ると言った。会ったときに、アフリカに来た経緯を説明したいと言っていた。賢は電話を切って、今日一日の省察をし、瞑想をした。瞑想が深まると、ストックホルム・アーランダ国際空港のイメージが沸きあがって来た。遠方から見ている感じがする。空港を見渡せる場所に居る感覚になった。突然激しい衝撃を受けたような気がした。4と273という数字が頭の中に現れ、273が爆ぜるように消えた。賢は「これは何かの暗示だ」と覚った。賢は昨日と同じように深い内観の瞑想に入っていた。

翌朝4時に賢たち3人はチェックアウトを済ませ、浮島の車を待っていた。4時半でも間に合うのだが、賢がどうしても30分前に出たいと二人の女性に告げた。二人の女性はそれに従った。浮島が辺りをきょろきょろ見ながら、エントランスを入れて来た。

「おはようございます。昨日は失礼致しました。もう、チェックアウトは済みましたか？」

全員挨拶をした。賢が言った。

「3人だけチェックアウトしました。浮島さん、大丈夫でしたか？今日は急に時間を早めて、申し訳ありませんでした。どうしてもそうしなければまずいと思ったものですから」

「はい、後で、車の中でお話しましょう。6時40分のフライトですから、十分時間はあるのですが、直ぐに出た方がいいのですね？準備がよろしければ、出発しましょうか？」

ベルキャプテンが荷物を車に積み込んでいる間に、3人は車に乗り込んだ。賢は辺りに意識を拡大してみたが、不調和な感情の波は一切感じなかった。車を走らせながら浮島が言った。

「わたくしですが、一昨日はホテルから戻って、支社の面している通りに出て直ぐでした。支社まであと200mほどのところで後ろから来た、黒い車一車種も、ナンバーも認識していませんが、その車が通りがかりに発砲してきました。初めプツッ、プツッという音がして、そのあと、ビシッ、ビシッと音がしました。銃を発射している音は聞こえませんが

した。消音装置を付けていたのでしょう。車に振動が感じられました。わたくしは急ブレーキを踏みました。すると、黒い一多分黒だと思いますが、黒い車が走り去りました。あのインド人たちの乗っていた車とは違いました。わたくしは、とても怖くなってきて、社に戻ると急いで車を車庫に戻し、外周を確認してみました。弾痕がありました。わたくしは、直ぐに警察に連絡しました。警察が来て、事情聴取を受けましたが、車を特定できないことが分かり、警察がスウェーデン内での関連事件が無いか、調べることになり、わたくしは翌朝再度、説明することになりました。皆さんのことも説明しました。警察の話では、最近の記録を調べた限りでは、関連のトラブルは無いとのことでした。内観さんに言われたとおり、警察もわたくしに、車を変えて、1日外出しないように、そして皆さんの出発の日程を変更するように、と言いました。そんな時、折も折、本社から連絡が入って、出荷のミスが発覚したので、最近入荷の製品を緊急に棚卸するように言われました。昨日は支社の関連部署との連絡や、倉庫に連絡しての在庫の調査に追われました。昨日の内に慎重を期して、社名の書いて無い大型のバンを用意させて、その車で家まで帰ったのです。この車ですけど。回り道していますから、追跡けられてはいないと思います。今回の失態をどうぞ、お許してください。用心が足りませんでした。それで、どうして出発を1時間早めたのですか？」浮島の丁寧な説明に、賢も恐縮して言った。

「随分大変な思いをさせてしまっていて、それに今朝も無理を申し上げて、済みませんでした。無事ストックホルムを発ちたいと思いますが、一つ、不安がありまして……昨晚瞑想中に妙な数字が頭に浮かんだのです。4と273という数字です。何か心当たりはありませんか？」

「4？と言えば、今日の日付じゃないですし、月も違うし、フライトナンバーも……確か違いますね。そう、敢えて言えばこれから入るウブサラ街道というハイウェイが4号線ですが……どうかしたのですか？」

「確かなことは言えませんが、4と273が現れた後で、273が爆ぜるように消えたのです。何か273という数字は避けた方がいいと思うのです。フライト番号を調べてみました。1533でしたから関連は

無さそうです。ゲートも決ってないし……でも、イメージの中に空港が現れたのです。それと数字の破裂、それで30分出発を早めることを思い付いたのです。」

「そうですか。4号線から、空港に入る道アーランダ道路に降りますが、その道を行くと直ぐに空港です」

「4号線とアーランダ道路がクロスする辺りから、空港が見えますか？」

「ええ、確か見えたと思います。空港はすぐ近くですから」

「その道は何号線ですか？」

「ちょっと待ってください、調べてみます」

浮島はカーナビシステムを操作して、空港の近くを表示した。果たしてアーランダ道路は273号線だった。浮島が言った。

「分かりました、この道路は止めましょう。もう少し先に北側から4号線を抜けて、反対方向から空港に入る道がありますから、そっちを迂回しましょう」

30分ほど走ると「Arlandavagen」という表示が現れた。浮島が言った。

「これがアーランダ道路です。通過しましょう、時間は十分ありますから」

それから8分ほど走ると浮島が77号線に降りると言った。それからは狭い道になったが、浮島は車を飛ばした。皆、それ程急ぐ必要はないのではと思っていたが、15分ほど走ると反対側から再び273号線に戻ることができた。初めの予定より30分ほど遅れたが、無事空港に着いた。それでもフライトの1時間30分前だった。浮島が荷物を降ろすと、3人は何故か分からないが追われるように急いでチェックイン・カウンターに向かった。浮島が駆ける様にチェックイン・カウンターの所にやって来た。3人は交互にお礼を言った。浮島は亜希子のことが心配のようだった。ここまで無事に済んだことにほっとしているようでもあったが、同時に、周囲への警戒は怠っていないようだった。浮島は3人が荷物検査のゲートに消えるまで佇んで見送っていた。意外にスムーズに出国ゲートを抜けることができた。搭乗までにまだ1時間以上時間があつ

た。出国ゲートの手前の休憩所で休憩することにした。

「リーダー、良かったですね。何事も起きなくて」

梓が言った。亜希子は微笑みながら、梓に向かって言った。

「香川さんとコンタクトできたのかしら？あの方を思い出すたびに、あの、九州支社で落ち込んでいらした姿が思い出されるのです」

賢が応じた。

「昨日、電話したよ。元気そうだったよ。僕も彼に会ってみたいね。何故、そこまでするのか。説明してくれるって言っていた・・・」

その時、10メートルほど先のテレビに爆発の映像が映った。ニュースで何か言っている。賢は席を立ち、テレビスクリーンの近くに行った。UNNの放送だった。空港前の道路が爆破された直後の映像だった。空港に入る273号線の両方向からのアクセスポイント2箇所が爆破された。賢たちが空港内に入って10分ほどしてからだった。幸い爆破で被害を受けた車は無いようだった。しかし、その後、車で直接空港に入ることができなくなり、致命的な渋滞を引き起こした。車道に沿った歩道が車から荷物を引き降ろして、空港に急ぐ人たちで、ひしめき合っている映像が映し出されていた。また、4号線と273号線の合流地点と賢たちが迂回して来た77号線と273号線が合流する地点の渋滞状況も映し出されていた。空港内に入っている車が外に出られなくなっていると放送していた。航空機は賢たちのフライトとその後のミラノ行きのフライトまで合計5便は運行されるが、その後のスケジュールは立っていないと説明していた。賢はこれだったのだと思った。幸い被害者は無いと報道されていた。しかし、同時にキャスターは誰か特定の人間の出国の阻止を狙った計画的な犯行だろうと説明していた。イスラムのジハードを語ったテロでは無さそうだと説明していた。賢が気付くと、隣に二人の女性が来ていた。梓が言った。

「道路が爆破されたのですか？犯人は何をしようとしていたのでしょうか？」

「誰を狙ったのかな？道路を遮断して、空港の手前で渋滞を引き起こして、やむを得ずに歩き出した人たちの中から、ターゲットを確認して狙

撃するつもりだったのかもしれない。30分前にホテルを出ていて正解だったな。もし僕らを狙ったのなら、どうして、フライトの時間を知ったのか不思議だな・・・まあいいか。みんな無事だったんだから」
空港内は騒然としてきた。いろいろなエアラインの係員が忙しく動き回っているのが分かる。3人はナイロビでの行動計画を話し合った。

「リーダー、ナイロビでは1泊するでしょう？まだ、ホテルを確保できていません」

「昨日、香川さんに頼んでおいたよ。ナイロビ支店の事務所は市内だけど、香川さんのアパートは空港の近くにあるようだ。その近くのホテルを確保してもらおうように頼んだ」

「また、どうして、ケニヤのような取引の少ない国に支店を設けたのでしょうかね？それに香川さんのように経験の浅い人を駐在させて、会社は何をしようとしているのかしら？」

梓が言った。賢は黙って頷いた。

ナイロビ

飛行機を降りると、3人は意外と気温が低いのに驚いた。ナイロビ国際空港は小さく分かりやすい空港だった。しかし、空港の主要な施設は規模が小さかったので、入国審査は列が出来、バゲッジクレームになかなか荷物が出てこなかった。飛行機を降りてからゲートを出るまでに1時間以上かかった。ゲートの外に香川が待っていた。日焼けして、ワイルドな感じで、以前九州支社で見た香川とは別人だった。時計は8時50分を指していた。

「お疲れ様でした。入国審査は問題なかったですか？」

「遅くに出迎えいただいて、ありがとうございます。香川さんからのファックスいただいていたので、そのコピーを見せましたし、ビザも前回こちらに来たとき、取得してありましたので問題ありませんでした」

亜希子が言った。

「この国はスワヒリ語でないと生活できないのでしょうか？香川さん、生

活なさるの、大変でしょう」

「いえ、お嬢様、ナイロビは治安はあまりよくないですが、言葉なんて分からなくても何とかあります。ここはイスラム教の人達が多いんですが、彼らは基本的に皆、親切ですから。お嬢様、それに田辺さん、お疲れになったでしょう？」

亜希子はなおも聞いた。

「わたくしたちは大丈夫ですわよ。ねえ、田辺さん。それより、香川さんこそ、海外の駐在大変でしょう？こちらには単身で赴任されたのですか？」

「ええ、単身で来ています。事務所には、わたしの他に現地人が5人居るだけです。どこに行っても滅多に日本人には会いません。観光客もほとんど居ません。でも英語を話せる人がちらほら居ますから、助かるときもありますよ」

亜希子と梓は、香川の物に動じない逞しさに、男らしささえ感じた。賢が言った。

「お世話になります。今日はホテルに宿泊して、明日ルワンダに向けて発つ予定です。大丈夫でしょうか？」

「そうですか、チケットはまだだとおっしゃいましたね。ここで手続きしてしましましょう。朝の便しかありませんけど、大丈夫ですね？」
そう言うと、香川は3人のパスポートとe-チケットを集めて、ケニヤ航空のカウンターに向かい、10分ほどで翌日のフライトを確保して戻って来た。8時丁度の便だった。ルワンダには夕方に着く。香川は自分も同行すると言った。

ホテルまでは10分ほどだった。空港と市街地の中間にあるホテルだと香川が言った。ホテルに着くと3人は直ぐにチェックインした。3人は香川に促されて、一旦部屋に入り、直ぐにロビーに降りて来た。チェックイン・カウンター横のレストランで少し会話をすることにした。

「皆さん、お疲れでしょうから、今日は10時まで、少しお付き合いいただいで、後は明日にしましょう。よろしいですか？明日は朝の便ですから、あまりのんびりしていただけません。6時でよろしいですか？チ

ェックアウトしておいていただけますか？飛行機の中で簡単な機内食が出ると思います。でもキガリには8時半に着きますからあちらに着いてから食事をしてもいいですし」

3人は相槌を打った。賢が言った。

「香川さん、ルワンダには行ったことがあるのですか？」

「はい、今度が3度目になります」

亜希子が言った。

「香川さん、祐子お姉さまにはお会いになりましたか？」

「いいえ、まだ、お会いできていません。今度は皆さんと一緒にですので、必ずお会いできるものと確信しております」

「わたくしたちも、前回2度訪問したのですが、会えませんでしたのよ。祐子お姉さまは、わたくし達とお会いにならない覚悟でいらっしゃるようなのです」

「それは、どうしてでしょう？そこに居るのはご自分を拉致した人たちでしょう。それなのに、どうして……」

「何か、事情が変わったようなのです。わたくしたちには理解できないような、何か特別の事情ができたとしか考えられません」

亜希子は、自分の知っている詳細については口を噤んだままだった。賢も、梓も今は話さない方がいいと感じていた。

「じゃ、一体、どうしたらいいのでしょうか。わたしはお嬢様をお救いするためにアフリカにやって来たのです。もし、お嬢様がわたしたちと会うのを好まれないとしたら、どうして、お救いしたらいいかわかりません」

賢が言った。

「香川さん、やはり、祐子さんを救うためだったのですね。祐子さんは後戻りできないほど、深くルワンダの社会に入り込んでしまったのだと思います。キガリには僕の知り合いの鹿島啓介という人が、やはり祐子さんを救い出すために、日本から来ていて、いろいろ取り組んでいます。僕はこれから彼とコンタクトを取ってみます。もしできれば、彼とも会ってみませんか？」

「それは心強いです。是非お引き合わせください」

梓が初めて口をきいた。

「香川さん、これから支度をされるのでしょうか？今日はもうお帰りになった方がいいと思いますが……」

賢も頷いた。香川はまだ話を続けたいようだったが、諦めて帰宅した。3人も自分たちの部屋に戻ることにした。賢はシャワーを浴びると、すぐに康介に電話を掛けた。日本を発つ前に梓が連絡を入れていたが、賢たちが既にナイロビにまで来ていることを知ると、康介はいつもの元気な声で応答した。

「よくここまで足を伸ばしてくれましたね。賢さん、どこから来たんですか？予定より早いんじゃないですか？びっくりしましたよ。明日は特にこれといった緊急の予定も無いすから、迎えに行きますよ。ナイロビからだ、8時半着すね」

賢も康介の声を聞いて、活気が漲ってくるような感覚を覚えた。電話を切ると賢はいつもの通り一日の省察と、瞑想を行った。次第に内観の層が深くなっているのが分かる。この日はもうこれ以上深く落ちることができないと感じるほど自分が小さく、重くなった。そこから一気に拡大してゆく意識の展開を、まるで空一面に広がる花火を見ているような感覚で眺めていた。一本の草が生え、その草に花が咲き、種ができて、その種が四方八方に飛散し、それらの種から芽が出て、また、それが開花し、種になって飛散し、その過程が果てしなく続いてゆく。様々な植物が生み出されてゆく。そこにはそれぞれ固有の意志が作用して、様々な葉を付け、様々な花を咲かせ、様々な種を作り出している。どこまでも広がる植物の世界を見つめていた。賢は自分がそこに立つ人であり、植物でもあり、そして、同時に大地でもあることを意識していた。それは無限に続いているようだった。ふと気がつくあたりは薄明るくなってきていた。5時半を回っていた。賢は急いで身支度を調べ、衣類などをまとめてスーツケースに放り込むと、部屋を出た。ロビーには既に亜希子と梓の姿があった。梓はまだフロントのカウンターの男性と話をしている。亜希子は嬉々としてスーツケースを引きながら賢の方に向かって

歩いて来た。

「おはようございます。あなた、今日はキガリに着いたら、どうされますか？すぐに鹿島さんに、お会いすることができるのかしら？」

「おはよう。彼は迎えに来てくれるらしいよ。もうチェックアウト済ませたの？」

「梓さんが、今、チェックアウトしています。大分かかっているようですが・・・」

梓は精算に手こずっているようだった。奥からマネジャーのような男も出てきて、カウンターの下のPCを操作しながら、ブツブツ言っている。賢はスーツケースを押して直ぐにカウンターに向かった。

「No, no, I didn't watch the movie. I just watched UNN news on the TV.」(いいえ、いいえ、わたくしは映画は見ていません。わたくしはテレビでUNN ニュースを見ただけです)

「梓、おはよう、どうしたんだ？」

「おはようございます。見てない映画の代金を請求されたので・・・」

「幾ら？」

「1000シリング、1000円くらいです」

「払っちゃいなよ。ここでもめてもしょうがないから」

「そうですね」

梓が支払いを承知すると、カウンターのマネジャーが、支払いは結構だと言った。そして、フロント係にシステムの誤作動だろうと言ってから、賢の方をみて微笑んだ。賢も会釈を返した。賢のチェックアウトはスムーズに済んだ。梓が言った。

「なぜ、わたくしだけトラブルのかしら？」

「何か不安があるんじゃないか？」

「トラブルがあったらまずいから、早めに降りて来たんですよ。なに・・・」

「それだよ。自分で引き寄せているじゃないか。はっはっは」

梓が少しふくれたような顔をした。3人はスーツケースを引いてエントランスに向かった。ちょうどそこに香川が現れた。ベルボーイと香川と

賢の3人で車に荷物を積み込むと直ぐに出発した。空港には直ぐに着いたが、香川はまず空港の送迎場所で荷物をすべて下ろしてから、車を駐車しに行った。香川は手荷物だけだった。賢たち3人はスーツケースを引いてエントランスの前で香川を待った。現地人が何か話し掛けてきた。賢は首を横に振った。梓が心配げに言った。

「どうしたんですか？」

「いや、手伝おうかって、言って来ただけだよ」

「大丈夫ですか？悪い人じゃないでしょうね？」

「梓、心配しすぎだよ。いい人だってたくさんいるんだよ。とにかく治安が悪いと言うと、歩いている人がすべて悪人に見えてくる。思考から意識に作用するマイナス面だね」

「でも、常にリスクを考えて行動する、これが鉄則でしょう」

「リスクヘッジは常に考えた上で行動をする必要があるけど、すべてをリスクと考えてしまうと、何でもないものまで、危険な存在に見えてきてしまうよ。そうすると、危険なものが顕在化してくる。意識はそういう働き方をするんだよ」

香川が急ぎ足で戻って来た。

「お待たせしました。ここの駐車場は、車上荒らしが多いんです。だから、できるだけ人目に付きやすい場所を探して駐車して来ました。さて、空港の中に入りましょう。ところで、ここで誰かが近づいて来ませんでしたか？」

「ええ、一人何か手伝うことはないかと聞いてきた人がいました」

「気を付けてくださいね。空港には時々、スリのグループがいますから」梓がにっこり笑った。賢はただ頷いただけだった。

亜希子と香川、賢と梓が並んだ席になり、亜希子と賢が窓際の席になった。飛行機に搭乗すると、亜希子は覗き込むように外を眺めた。まるで何かを探してでもいるかのようだ。離陸すると直ぐに機内食のサービスがあった。食事はパンとオムレツ、サラダ、ヨーグルトだった。亜希子はあっという間に食べてしまうと、また窓の外をじっと眺めていた。口にしたオムレツを飲み込むと、梓が言った。

「あのアーランダ空港への道の爆破は、浮島さんの車の狙撃と関係があるのかしら？あのインド人たちはわたくしたちを追ってきたのでしょうか？」

「うん、それが今ひとつ分からない。あのインド人たちがあそこにいたこと自体が解せない。どうもしっくりこない。あの若者たちの集っていた広場の後、我々を尾行しただろう、そして、浮島さんのリムジンカーの客席の狙撃、それから空港を封鎖するようなアプローチ道路の爆破。どの一つをとってみても、しっくりこないと思わないか？」

「はい、リーダー、もしあのインド人たちがわたくしたちのことを見抜いていて、行動計画を知っていたとしたら……」

「梓、プロジェクトのメンバーや総務の連中はこの出張の詳細をどの程度知っていたのかな？」

「リーダー、社内の人を疑っているのですか？」

「いや、情報の漏洩ルートがあるか、どうかを考えているんだ」

「本社では、楠木さんと、あとは稟議書を決済した人たち、MIプロジェクトだと、社長と総務部長だけです。それと、小塚さんと長谷部君がどこまで他の人に話しているか。あつ、そう、政務次官とその取り巻きの人たちも知っていますね」

「例えば、その中の誰かが、策を講じて、ハーレムのインド人に連絡するなんて事は、全く考えられないよな。大体、社内でインドでの行動を知っている人は、君と僕しかいないのだから、あとは亜希子……」
亜希子が後ろを向いて、賢に言った。

「賢さん、わたくしのこと呼びましたか？」

「いや、何でもないよ」

「ルワンダに近付いてきましたわ。外をご覧になってください。アフリカの草原が続いています。もうじきキガリが見えますわ」

「リーダー、わたくしのことを疑っていますか？」

「ばかな、梓を疑う気持ちなんて、これっぽっちもないよ。僕の考えているのは、この後の行動計画についてなんだ。できるだけ、事前のスケジュールからずらして行動した方がいいような気がしてきたんだ」

「そうですね、これからはそのようにしてみましよう。ルワンダからインドに向けて移動するのはやめましようか？」

「うん、オーストラリアに先に行ってしまうか。問題は小塚さんと長谷部君だ。どうやって変更を連絡するかということと、e-チケットの変更をどうするかだね」

「それは、わたくしが何とかします」

亜希子はただ、じっと外を見つめていた。やがて飛行機はキガリの空港に着陸した。入国審査を済ませ、バゲージ・クレームで荷物を取ると、4人はEXITを出た。果たして康介が待っていた。

キガリ

「案外、早かったっすね。よく遅れるっすよ。お金替えたっすか？」

「鹿島さん、またお世話になります。荷物も大丈夫でした。お金も替えて来ました。ちょっと紹介します。こちらは香川さん。東領製作所のナイロビに駐在しています。こちらは鹿島康介さん、ムーンボックスのキガリ駐在をされています」

二人は握手を交わした。亜希子と梓はナイロビに着いたとき、香川をワイルドだと感じたが、康介には、更にその上を行っている男の姿を見た。康介は肌の色よりその身のこなしが、アフリカの人に似ているとさえ感じられた。梓が言った。

「鹿島さん、また一段とアフリカ人ぽくなりましたね」

康介は2、3度軽く頷いて、言った。

「日本人は居ませんからね。ここはアフリカなんすよ。ねえ、香川さん」

「ええ、ほんとうに。鹿島さん、いつからこちらに？」

「4ヶ月になりますかね」

「そうですか、僕はまだ2ヶ月経っていませんから、分からないことだらけです」

「どうして、こちらに来たんすか？」

「はい、ある人に会って、その人を日本に連れて帰らなくてはならない

んです」

「まさか、祐子さんなんて事はないっしょうね？賢さん」

「あなたと同じですよ。香川さんも一途なひとですから……」

「僕には責任があるのです。僕が、もう少し強くお嬢様に動かないように言っていれば、こんな事にはならなかったんです。すべて、僕の責任なんです」

「そんなことはありませんよ。起きてしまったことは必然なんです」
賢が言うと、康介が言った。

「賢さん、それで平気なんですか？必然で……俺はじっとしてられないです。あの人のためにならなくてはならないんです。これが俺の必然なんしょう。とにかく、車を取って来ますから」

康介は駆けるように駐車場に向かって行って、少ししてから車を送迎場所に横付けした。

「今日の計画はどうなってるっすか？」

「こちらで、祐子とコンタクトを取りたいんですが……具体的には……」

「大丈夫っすよ。今日のアポイントメントとってあるっす」

賢と梓は、康介の行動力に感謝した。そして、また、前回のように、会えるかどうか分からない訪問の情景を頭の中に描いた。

「バラックはクツに殺られたっす。今は、ママユウコの正念場だと思うっすよ。ブチの首長が殺られたっす。ブチの人たちが黙ってると思うっすか？ママユウコがそれをどうすると思うっすか？こんな時っすから、ママユウコに会うのは至難の業と思うしょ？」

賢たち4人は康介の奥歯に物の挟まったような言い方に、不自然さを感じた。しかし、康介の顔には常に微笑みが浮かんでいて、前回の悲壮観を感じさせる姿とは明らかに異なっていた。賢は思い切って聞いてみた。

「鹿島さん、何かいいことがあったんですか？ずいぶん楽しそうじゃないですか」

「そうっすか？まあ、今日はお疲れっしょうけど、夕方までには元気が戻りますよ。」

「ええっ？」

賢はちっとも話が咬み合わないと感じた。亜希子が言った。

「鹿島さん、もしかして、祐子お姉様にお会いになったのではないのですか？この間の鹿島さんと、あまりにも違いますもの……」

「亜希子さん、よくおわかりですね。実はお会いしました」

4人はびっくりした。香川が言った。

「ほ、本当に？」

「ええ、祐子さんから呼び出しを受けたのです」

梓が言った。

「えっ？益々、理解できないわ」

「あの方の変わり方ときたら、驚きと、感激で、顔がくしゃくしゃになりました。あの方の考えておられることは、僕なんかは、足元にも及びませんよ。後で話しますけど……」

いつの間にか康介の話し方が変わっていた。亜希子が言った。

「鹿島さん、今お聞きしたいですわ。祐子お姉様のことは今すぐに教えていただきたいですわ」

「亜希子さんがそう言うのでしたら、お話します。祐子さんはブチの人たちみんなが、豊かに生きられる社会を築こうとしているのです。組合のような組織を作って、コーヒーやお茶を住民全体がバランスよく生産できるようにしたり、ジェノサイドで夫を失ったような、明日の食べ物にも困る貧しい人たちに、お金を融資して自立させ、起業させたりしようとしています。単なる部族長ではなくて、まるで事業家のような事をしようとしています。僕は、支援してほしいと頼まれたんです。今日は祐子さんに、会う約束をしてあります。彼女はもう、いままでのような拉致されて、売り飛ばされた、一人のか弱い女性なんかじゃありません。ブチ族の族長の役をこなしているのです。みんな、ママと言って彼女の事を慕い、尊敬しています。とてもスケールの大きな人になっています。僅か5ヶ月かそこらの間に、この変わりようは奇跡的です」

賢は黙っていた。祐子の変貌は、賢にとっては苦しいものだった。祐子が次第に遠くに行ってしまうような気がしてきて、首を振ってその気持ちを吹き消そうとした。亜希子が身体を乗り出すようにして、言った。

「事業家のようになったのですか？もともと、ビジネスウーマンのような、とても素敵な祐子お姉様でしたから、さぞ、堂々とされていて、頼もしいでしょうね。鹿島さん、そうお感じになりませんでしたか？」

「いいえ、全くそんな感じはしませんでした。服装は部族長を感じさせるものを身につけておられましたが、その優しい物腰は、日本にいらした頃の祐子さんより、数段穏やかで、暖かい感じを受けました……今日はこれから一旦ホテルに寄って、荷物を預けてから出掛けましょう。お疲れのところ、大丈夫ですかね？」

前回宿泊したホテルと同じホテルだった。予約の確認をすると、フロントの女性は愛想よく、

「*****」（あと1時間待てばチェックインできます）

と言ったが、鹿島はそれを断って、荷物のキープのみを頼んだ。4人ともそれほどの疲労感を感じていなかった。それより、むしろストックホルムでの緊張から解放された安堵感で満たされていた。

「これから祐子さんの家に向かいます」

と鹿島が言うと、亜希子は身が引き締まる思いとともに、喜びの感情が沸き上がってきて、元気よく

「おねがいします！」

と言った。梓も「これまでやってきたことがここでやっとなった」と感じた。市街から出ると、でこぼこ道になった。車が激しく振動する。皆、無言になってしまった。康介は黙々と運転した。車は時々、道路の穴にタイヤが落ち、酷く揺れた。しかし、4人は車体の窓の上に取り付けてある取っ手にしがみついて、ただ必死に体型を維持しようとしていた。言葉は一言も発しなかった。やがて雑木林のような道を抜けると1軒の大きな平屋の家の前に出た。

「着きました。皆さん、まず僕が行ってきますので、少し車の中で待っていてください」

そう言うと、康介は車を降りて、家の入り口に向かった。ドアをノックすると、一人の女性が姿を現した。4人はそれが祐子だろうと思い、凝視した、しかし、それは明らかに祐子とは違う、高齢な女性だった。康

介とその女性は立ち話をしていたが、やがて康介が手を振って、4人に車から降りて来るように合図をした。4人は急いで車から降りると、康介の元に行った。高齢の女性は4人に向かって頭を下げた。

「祐子さんは、急用で出掛けてしまったようです」

康介がそう言うと、4人はプツツと緊張の糸が切れて、気が抜けたようになった。高齢の女性が言った。

「わたし、マリー・ジュベステルです。日本から大変ですね。家の中入ってください」

一瞬、香川を除いた4人は凍り付くように、身体から血が引いてゆくのが感じた。梓は腕に鳥肌が立っている。垂希子の顔色が青くなるのが、賢にははっきりと見て取れた。ヨーロッパ系の顔をした高齢の女性が日本語を話したことで、香川も奇妙な感覚を覚えていた。4人は必死に冷静を装った。康介が自己紹介すると、4人もそれぞれ自己紹介した。マリーが握手するために出した右手を、誰も握り返さなかった。5人が案内されて家の中に入ると、そこは広い居間になっていて、奥にテーブルと20脚ほどの椅子とが置かれていた。マリーは5人をそのテーブル席に案内した。

「鹿島さん、ここ来たことあるね？ママがテーブル用意した。わたし、ママの代理。ママ、謝っていた。ごめんなさい言っていました」

鹿島が言った。

「何か重大なことが発生したのでしょうか？」

「ママ、部族の首長です。ママがいないとだめ。今日はだめ」

「今日は会えるっておっしゃっていましたが・・・」

「ママ、鹿島さんだけ会える。他の人会えない言ってた」

賢は、やはりそうかと思った。しかし、この女性の言っていることをそのまま信用してよいものかどうか迷った。いずれにしても祐子は自分たちに会うことができない状況にあるのだと思った。賢は思い切って、聞いてみることにした。

「あなたは、祐子さんとはどういう関係ですか？」

「わたし、ママの部下です」

じれったくなってきた梓が言った。

「あなたは、はじめからママの部下だったのですか？」

「わたし、インドからママをつれて来ました。だけど、今はママの部下です。I have been working for myself and for my mother country. I regret now that I have sinned against the miserable and poor people. Mama would have allowed and saved me, in spite of my damnable behavior. I understand she would be the Goddess. She would have come here to help Rwanda and the World, I believe. (・・・わたしは自分の為、母国のために働いてきました。わたしは今、悲惨で貧しい人々に対して罪を犯してしまったことを悔いています。ママはわたしの憎むべき行為をお許しになり、わたしを救ってくださいました。彼女は女神であられると思います。彼女はルワンダと世界を救うためにここに來られたのだと信じています)

涙ぐんで話すマリーを見て、亜希子も涙ぐんだ。梓が言った。

「やはり、あなたが祐子さんを買ったのですね」

「はい、わたし、ママをバラックの奴隷にするため、買いました。わたしは死んでお詫びしよう思いました。ママわたしを許して、ルワンダのため働くのいいと言いました」

康介がぼつりと言った。

「それにしても、よく落札できたな」

それを聞いてマリーが言った。

「わたし、オークションの時、ママが光っているの見た。持ってたお金全部出した。1ミリオン出した。なぜか分からない。知らずに落札していた」

香川が言った。

「あなた、あなたのしたことは祐子さんが許しても、みんなが許さないと思うよ」

「わたし、もっと悪い女。クツとブチ戦わせた。悪い女」

そう言うと、マリーは声を出して泣き出した。しばらくみんな黙ってマリーを見ていたが、やがて泣きやむとマリーは言った。

「ママ、わたしを赦してくれた。一人だけ。この命、ママに渡した」
非難する気持ちで話していた5人は、言葉を失った。

賢は今の祐子は、祐子ではなく、ママユウコなのだと思った。悲しみが込み上げてくる。香川が言った。

「ジュベステルさん、僕も今、アフリカに駐在しています。ナイロビですけど、直ぐ近くです。祐子さんのお力になりたいのですが……」

「ママ、今とても忙しい。多くの人のお力借りたい、思ってる。ママ、喜ぶと思います。みなさん、ちょっと待ってね」

そう言うと、マリーは部屋の隅に行き、コーヒーのポットと紙コップなどを盆に載せて持って来た。

「わたし、あなた達の話、聞きます。質問答えます」

亜希子が肩を落として言った。

「明日も、お会いできないのでしょうか？」

「いいえ、できない思います。ママ、あなた達会えない言っています」

賢は、自分たちが祐子を助けるためと思って、こうして訪れることは、祐子にとって苦しみや、悲しみになっているのだと思った。賢はこれまで、ことあるごとに意識で祐子と話をしてきた。そのときの祐子のイメージはこの3次元世界で見る姿より、更に精妙な姿に感じられた。肉体を伴って、改めて祐子に会って、どれだけの価値があるのだろうかと思った。しかし、ここに来た自分以外の人たちには、自分がするように意識で祐子に会うことはできない。直接顔を合わすことが現実で、それ以外の現実は無いのだ。「世界のほとんどの人の認識が変わるまでは、このような状態が続くのか」と、ふと思った。梓が康介に向かって言った。

「祐子さんのために、何かわたくしたちにできることは無いでしょうか？」

康介は、口を結んだまま何も応えなかった。

「わたくしは、ここに残って、祐子お姉様のお手伝いをさせていただきます」

亜希子が言った。誰もそれに抗う者は居なかった。それから暫くの間、マリーは祐子の考えている、理想郷について説明した。その達成が如何

に困難な事か、マリーが必死に説明している姿からは、誰にも、二つの部族を戦わせ、祐子を落札して連れ去った諜報員の姿は連想できなかった。

一行はホテルに戻ると、直ぐにチェックインを済ませた。一旦自分の荷物を部屋に置いてから、全員ホテル内のレストランに集合することにした。遅めの昼食を取りながら5人は、今後の事について相談した。康介が自分の現在取り組んでいることを説明すると、賢も亜希子も一種の焦燥感に駆られた。日本から直接援助できることは限られている。梓が言った。

「日本に帰ったらジェットロに相談してルワンダとの取引を積極的に推進できる組織を立ち上げる支援をしたらどうでしょう。結果的にそれが祐子さんを助ける事になると思います」

「うん、そうだね」

賢は相槌を打った。しかし、賢は別のことを考えていた。祐子の事業を支援する事自体より、祐子の意識の動きを見守ることの方が重要に思えた。香川が言った。

「僕はどうしたらいいのでしょうか。祐子お嬢様をお救いするために、アフリカ赴任を申し出たのですが、下手に動けば、祐子お嬢様の活動の邪魔になるばかりで……」

賢が言った。

「僕は、祐子の行動を見守る事に徹したい。祐子が支援を頼んできたら応じるつもりだが、それまでは見守っているつもりだ。今、祐子が必要としているのは鹿島さんの力で、僕らの力ではない」

鹿島は言った。

「賢さん、冷たいですね。あれほど賢さんの事を好きだった祐子さんですよ。ずっと窮地を生きてきて、今、やっとそこから抜け出そうとしているのですよ。それを見守るだけですか？」

「ただ見守るのも、苦しいんですよ。動きはなくても、自分の中に祐子のすべての動きを包含しなくては、本当に観守ることはできないんですから」

「日本にいたら、そんなことできないでしょう。見守るつたつて、見えな
きゃどうにもならないんじゃない」

鹿島はやや不機嫌そうに言った。賢は黙っていた。亜希子が言った。

「鹿島さん、賢さんにはそれができるのですよ。でも、わたくしは、こ
こに残って祐子お姉様のお手伝いをしたいと思います。鹿島さん、どう
したらここに住むことができるか教えてくださいませんか？」

鹿島は不機嫌そうに言った。

「亜希子さんじゃ、無理なんじゃないですか？時にはひどいものを食べたり、
汚いところにずっと居ることになったり、古い衣類を身につけて、
しかもしばらく洗濯が出来なくなるとか、時々停電してしまつて、何日
間か真っ暗な夜を過ごさなければならぬとか、特に祐子さんの生きて
いる世界じゃ、それが日常茶飯事だと思つすよ。光の無い真夜中に、
獣の鳴き声が近くで聞こえたりすると、頭のとつぺんからつま先まで、
冷たい水を浴びたようにぞつとするつす。気持ちだけではどうにもなら
ないつす。実際にそういう生活を体験しなくては、生きられるかどうか
も分からないつすよ。僕らのような粗野な男でさえ、やつと生きてい
るときもあるんすからね」

「わたくしは、どんなことも我慢します。こう見えても、かなりワイル
ドなところがあるのですよ」

「あなたのいうワイルドつて、こういうものも平気で掴めるとか……」
そう言いながら、康介は長いひものようなものを亜希子の目の前に翳し
て、くねくねと動かした。亜希子は「きゃっ！」と悲鳴を上げると、み
るみる顔から血の気が引いて、隣にいる梓の肩に顔を埋めた。しかし、
それ以上嬌声は発さなかつた。康介が自分のサファリパンツのベルトを
引き抜いて、蛇を真似て動かしたのだった。

「これは、ズボンのベルトつすよ。亜希子さん、怖くても、じつと観察
できるようになったら、アパート探しを手伝いますよ。これじゃ蜘蛛や
サソリでも仰天してしまうんじゃないつすか？」

亜希子は下を向いてしまった。少しして、うつむき加減になりながら賢
に向かって言った。

「それでも・・・わたくし、ここに残りたいのです。あなた、後でお時間をいただけますか？お話ししたいことがあります。わたくしは、絶対ここに住みます」

賢が言った。

「亜希子、その話は後で僕の部屋で話そう」

亜希子は力なげに頷いた。梓が、遠慮がちに言った。

「折角ここまで来たのですし、鹿島さんや、香川さんにもお会いできて、祐子さんの事を真剣に探している人がみな集まっているのですから、やはり、なんとかお願いして祐子さんに会った方がいいと思うのですが・・・」

香川もそれに同調するように言った。

「そう、僕もそう思います。祐子お嬢様はもう、このルワンダで生きてゆく決心をされているのかもしれませんが、あの方が僕たちに与えた影響は、僕たちの魂を揺さぶるほど大きいのです。もう、あの方にはご自分のことを思う心が薄れてきているように思います。きっと、僕たちの気持ちを汲んで、会っていただけたと思います」

康介が言った。

「賢さん、もう一度、祐子さんに頼んでみませんか？俺は、あんひとの心はルワンダの人々を救う事に向いているっすから、そんな切り口でアプローチを試みれば、必ず会ってくれると思うっすよ」

賢が言った。

「分かりました。みんながそう思うのだから、そうしましょう。鹿島さん、またアポイントメントを取っていただけますか？」

「賢さん、そうこなくちゃ。じゃ、今から電話してみます。少し待ってください」

そう言うと、康介は席を立ち、レストランを出て行った。暫くして康介は戻ってきた。賢たちのいるテーブルの近くまで来ると右手で拳を造り、親指を上を上げて、腕を軽く2、3回振って見せた。

「OKっすよ。ママユウコが会ってくれるって言ってます。ママユウコですよ。祐子さんじゃないんです」

「それはどういう意味ですか？」

梓が聞いた。

「ブチの族長としてのママユウコとしてなら会えると言っていました。だから、あまり感情的になって、ママユウコを連れ戻そうとしたり、以前の祐子さんを思って、自分の感情の中に引き戻そうとしたりしないでほしいと言っていました」

賢が言った。

「僕は大丈夫です。他のみんなはどうだろうか？」

みんなは亜希子の方を見た。亜希子は自分に向けられた視線を意識して言った。

「わたくしも大丈夫です。祐子お姉様ではなくて、ママユウコにお逢いすると心を決めますので。皆さん、わたくしを信じてください。大丈夫ですわ」

賢が言った。

「他のみんなも大丈夫ですね？」

全員頷いた。亜希子も嬉しそうにもう一度頷いた。康介が言った。

「実は、3時に会ってもらえることになったんす。今、1時50分すから、もうそろそろ出掛けた方がいいかもしれないっす」

それから暫くして一行は再びバラックの家に向かう康介の車の中に居た。悪路は全員の身体を激しく右に左にゆさぶっていたが、皆揺れに対してあまり抵抗せずに身体を車の動きに同調させていた。誰も午前中に向かったときほど緊張はしていなかった。賢は祐子がそのようなお膳立てをしたように思えて仕方がなかった。

家の前に着いたとき、康介が「今度は全員で行こう」と言った。康介がドアをノックすると、再びマリー・ジュベステルが姿を現した。マリーは会釈をすると、一行を導いて直接祐子の執務室に案内した。マリーが執務屋のドアをノックすると中から

「どうぞ」

と女性の声が出た。日本語であることを意識する前に、全員それが祐子の声であることを意識し、急に胸が熱くなった。マリーが扉を開けると、

賢たちの前に広い空間が現前した。その広い空間の一番奥に事務用の机があり、そこに紛れもない祐子の姿があった。祐子は立ち上がっている。マリーが中に入るように言ったが、全員入り口を入ったところで立ち尽くしたまま身動きできなかった。祐子も立ったまま身動き一つしない。マリーがもう一度、中に入るように言ったが、誰も動かない。マリーは一步壁際に身を引いて、黙ってしまった。祐子の目に涙が溢れ、頬を伝わって流れ落ちた。賢の目からも涙が溢れ出た。亜希子は唇をじっと噛みしめていたが、頬を伝わって流れる涙は胸に落ち、白いワンピースを濡らした。亜希子の噛みしめている唇がわなわなと震えている。梓も、香川も目を潤ませて祐子を見つめている。祐子が口を開いた。

「みなさん、ありがとうございます。みなさんのお力で、生き抜くことができました」

賢が応えるように言った。

「祐子、ありがとう。これまでずっと、君に導かれてきた。よく生き抜いてくれた」

亜希子が震える声で言った。

「お姉様、お逢いできて、夢のようです」

亜希子はそこまで話すと、もう言葉を発することはできなくなってしまった。必死に声を押さえて、むせび泣いた。

祐子が言った。

「あなた、亜希子さん、田辺さん、遠いところをわたしのためにいらしてくださって、本当にありがとう。感謝の言葉も見つかりません。香川さん、ナイロビにいらっしゃるのだそうですね。わたしのためにそうしていただいたと伺いました。どうお礼を申し上げていいかわかりません。そして、鹿島さん、このような機会を用意してくださって、本当に感謝しております。わたしは、もう皆さんにお会いできないと思っておりました。そうした方がいいと思っておりました。でも、香川さんのお話を伺って、わたしにまだ自分のことを思う気持ちが、残っていることに気付きました。折角遠くからいらしていただいた、もっとも大切な人たちの事を思う気持ちが、足りませんでした。あなたのおかげで、気付くこ

とができました。本当に感謝しています。そして、いつもわたしを支援してくださって、何とお礼申し上げていいかわかりません」

康介が言った。

「ママ、これは俺の一生の仕事なんすよ。お礼なんて言わなくてもいいっす。さあ、みんな、もっとママの近くに寄った方がいいっす」

康介に言われて、はっと気付いたように、皆ゆっくり部屋を横切って祐子の立っている机の手前まで進んだ。大きく見える祐子の姿が全員に強い印象を与えた。

「ここは、わたしの執務室なんです。その壁に貼ってある地図があるでしょう。それがこの国で武力衝突の起きた場所と、殺戮のあった場所です。そこには今でも苦しみを続けている多くの人たちがいます。それと、未だに恨みと不信の気持ちで生きている人たちも大勢います。少し考えてみてください。自分の夫を、息子や娘を、目の前で殺されたら、どんな気持ちがするか。そして、その後、どうやったら立ち直れるのかを。時間が経てば悲しみが薄れるなんていうのは、そのような激しい衝撃や悲しみを経験したことのない人の言葉なのです。もう、心の奥に焼き付いてしまった悲しみや苦しみ、そして憎しみはそんなに簡単に消せるものではありません。それを変容させるのは愛と慈悲の心しかありません。そして、その心を生み出させるためには、この地を平和で豊かな状態にすることが一番なのです。だから、わたしは、先ずこの国を豊かにしようとしているのです。みんなが豊かになれば、隣の人のことを思うゆとりが生まれます。そうすると、愛する心が芽を出してくると思うのです。自ずと天国ができあがります」

賢の目の前にいるのは、元の祐子ではなかった。明らかに人々の平和のみを願っている天女だった。亜希子の目には、祐子が姉の祐子ではなく、母の姿に映った。亜希子は小さな声で口ずさんだ。

「おかあさん」

亜希子の目から大きな涙のしずくがぼとりと床に落ちた。

「亜希子さん、泣いてはいけないわ。わたくしたちはこうして再び会うことができたのよ。そう、わたしはママと呼ばれているわ。みんなのお

母さんなの」

マリー・ジュベステルはその部屋での邂逅をじっと見つめていたが、祐子に向かって言った。

「ママ、リビングのテーブルに移動するの、いいです」

祐子は目を瞑るように静かに頷いた。マリーが全員を導いて部屋を出た。祐子はその場に佇んだまま、全員が部屋から出るのを見つめていた。全員部屋を出てしまうと、祐子を激しい悲しみが襲ってきて、涙が止め処なく流れた。祐子は声を殺してむせび泣いた。暫くして、深呼吸を3回すると引き出しからハンカチを取り出して、涙を拭い、部屋を出てリビングルームに向かった。リビングルームのテーブルには長手方向の片側に訪問者全員が座っている。反対側の長手方向の右端にマリーが座っていた。祐子は毅然とした態度で、訪問客に向かって、真ん中の位置に腰掛けた。真ん中の正面には鹿島が座っている。賢はその左側、亜希子が賢の左、香川が鹿島の右側、その右に梓が座っていた。椅子を引いて姿勢を正すと、祐子が言った。

「わたしは、現在ブチの中にフルマ カンプニという共同組合のような組織を作っています。カンプニは会社という意味です。ゆくゆくはブチのすべての農産物や、家内生産品をそこで扱うようにしようと考えています。これまでの個人での作付け、収穫、販売というプロセスの内、作付けから収穫までは従来通り個人にやってもらい、販売や取引、ひいては輸出といった業務まですべてフルマで行おうと考えています。そうすることで、ある程度、収穫高の増減による価格の変動を押さえることもできるでしょうし、品質管理もできるので、ブチの産出品の品質を高めることができると考えているのです。そこの組織を住民の共同出資で維持するようにすることで、相互扶助、貧困者への融資などが行えるようにもなると思っています。鹿島さんや、マリーの協力で、やっと資金の目途が立ちました。もうフルマの事務所の工事が始まっています。もし、皆さんが、フルマを支援していただければ、フルマは皆さんのことを大切に考えて、ブチの産出品の取引をさせていただきます」

亜希子が拍手をした。皆一斉に亜希子の方を見た。亜希子はにっこり笑

った。鹿島が言った。

「ママ、もう、うちの本社もその気になってきました。ムーンボックスとしては、「もし安定的にコーヒーの仕入れができるのであれば、フルマと長期契約を結ぶことも念頭に置くと」言っています」

香川が言った。

「僕はなんとしてでも、祐子お嬢様の協力をしたいと思っています。東領製作所でレアメタルや希土類の輸入を担当していましたので、一応その調達という業務も担当しています。特に希土類は中国に頼りすぎていて、政治的な思惑で翻弄されるのを嫌い、社はアフリカやカナダ、ブラジルなど、いくつかの産出国に輸入の可能性を調べる目的で、人を派遣しています。僕もナイロビに駐在できたのは、商品の拡販もさることながら、原材料の調達先の確保も担当業務の中にあります。僕の知っている限りでは、ルワンダでは、ニオブやタングステンなどを産出しているはずですが、フルマではそういう原材料の採掘や輸出などはやらないのでしょうか？」

「香川さん、ありがとうございます。わたしがあの朝、あなたの言うとおりにしていたら、あんな目に遭わなかったと思います。でも、今では、それが現在のわたしのミッションに辿り着くプロセスだったのだと認識しています」

そう言うと祐子はにっこり笑ってから、

「実はわたしには、その計画もあるのですよ。これはまだ、誰にも話していないのです。口外しないでくださいね。わたしの護衛をしてくれる兵士の兄弟にタングステンの鉱山で働いていた者がいて、その者にフルマの社員になってもらっています。彼に非公式にルワンダの鉱物の調査をさせています。特に重要7品目プラチナ、レアアース、インジウム、ニオブ、タンタル、ストロンチウム、ガリウムを調査しています。現時点で、詳細をお話しするわけにはいきませんが、いい感触を掴んでいます。もし、その可能性が出てきたら、当局に許可を得て山を手に入れ、開発しようと思っています。その節は香川さんにもご連絡いたします。是非よろしくお願いします」

香川は嬉しそうに微笑みながら応えた。

「よかった。やっと僕の出番が来ました。少しでも祐子お嬢様のお役に立てると思うと・・・今日は最高の日になりそうです」

祐子が言った。

「香川さん、そのお嬢様というのは、やめてください。わたしはもうお嬢様ではなくなりましたから」

鹿島が言った。

「俺のようにママって呼ばばいいんだよ。ママなんだから」

香川が頷いて言った。

「そうですね。分かりました。これからはビジネスの事で、こちらに伺わせていただいてもよろしいでしょうか？・・・マ、マ」

鹿島が声を出して笑った。祐子は了解して、頷いた。賢が言った。

「祐子、僕たちの取り組んでいることについて少し話すよ。彼女には少し席を外してもらえないかな？」

賢がそう言うと、祐子は首を横に振って言った。

「いいえ、彼女はわたしと一心同体なのです。いまでは彼女の助けがなければ何事も進まなくなってきました。それに、彼女はもう、昔のマリーではありません。もし彼女に聞かせられないのなら、わたしにもお話ししないでください」

「分かった。じゃ、話そう。まず、プロジェクトのことだが、ほぼ仕様は固まった。僕の推していた試行サイトを確保することは、まだ棚上げ状態だけど、各都道府県にあのVEAS館と同じような、バーチャル体験館を造る方向で動き始めている。政府が教育関連予算と道路特定財源の中から、予算の捻出を試みているが、なかなか難航してうまく進んでいない。僕らは前回に続いて、今回も世界の意識改革状況の調査と、人間の意識が安定している地域を訪れて、そこの仕組みや、人々の生き方などを学ぶ為に海外各国を廻っているんだ。ルワンダは祐子がいるから、今回も寄った。何の助けにもならないかもしれないが、僕は君が元気に生きていてくれればそれで十分だ。これまでは君を救い出すことに、全神経を集中してきたが、それは達成できなかった。本当に済まなく思う。

それと、もう一つ、君もびっくりするような製品を開発したんだ。これは田辺さんと、亜希子しか知らないと思うけどね。君も知っている原智明さんが凄い発明をしたんだ。それを製品化して、今、ものすごい勢いでそれが売れ始めているんだ。これは、東領製作所とは関係のない話だけどね・・・そう、香川さん僕たちがしていることは口外しないでくださいね・・・そのマシンは、既に亡くなった人の意識を呼び出して、その映像を画面に映し出したり、その人と話したりすることができる機械なんだ」

香川と鹿島は驚いて、目を見張った。鹿島が言った。

「うっそでしょう。そんなことできる訳ないっすよ」

梓が言った。

「鹿島さん、本当のことですよ。見るとびっくりしますよ。でもお値段は高いんです。一台100万円もするんですよ。亡くなった人と話ができるマシンは200万円。少し手が出ないと思うでしょう。でも飛ぶように売れているんです・・・祐子さん。わたくしは、あなたに、本当に申し訳ないと思っています。本当はあなたが、賢さんのアシスタント役になるのが一番よかったんだって、今でも思っています。わたくしが割り込んだばかりに、あなたに辛い思いをさせてしまって・・・」

「田辺さん、もうそのことはいいですよ。さっきも言いましたけど、ここまで来るプロセスは、わたしの運命だったと思っています。そう、必然だったんです。あなたの存在が、わたしをここに導き引き金だったことは事実ですが、だからと言って、あなたは何の後ろめたさを持つ必要もありません。この人のことをよろしくお願いします」

祐子が賢のことを「この人」と呼んだので、みな改めて賢の存在の大きさを思い起こした。

「あなた、素晴らしいお仕事をされていますね。その機械でどれ程沢山の人たちが救われるか知れません。もしその機械がここにあったら、まずいでしょけど」

賢には祐子と梓のどちらが年長者なのか分からなくなった。いや、この中で祐子が一番年長に感じられ、そして同時に最も若々しく見えた。

「祐子、本当の目的は、その機械とそれを体験した人たちに、自分の生命が永遠で、この世限りのものでないことを、実体験させることなんだ。そこから、意識を、次の世界に向けて開く事ができると思って、始めたことなんだ。亡くなった人たちの中には、苦しんで死んだ人や、人を恨んで亡くなった人も沢山居るはずだ。だから、そういう人は映らないようなフィルターを掛けることにした。もし、ここにそのマシンを持って来ても、現在はここの人たちはほとんどの人が亡くなった身内の人の姿をのぞき見ることはできないと思うよ。だけど、現在の日本では売れるから、収益も上がってくると思う。成功した暁には祐子のフルマにも投資することを検討するよ。勿論、無条件で」

祐子は亜希子に視線を移した。亜希子は真剣なまなざしになった。

「亜希子さん、あなたのメッセージ受け取ったわ。わたしはあなたのように自分をテレポートできないから、あのボールがあると助かるわ。亜希子さん、あなたはあなたの道に行くのがいいのよ。わたしと一緒にここで人々を助けるなんて考えない方がいいわ」

亜希子はやはりそう言われると思ったようで、唇を噛みしめてから言った。

「お姉様、わたくしがお嫌いですか？わたくしのことを疎いとお思いですか？」

「とんでもないわ。その逆よ。だけど、あなたが近くに居たら、わたしの心が柔になってしまうかもしれないわね」

「わたくしは、お姉様と一緒にのところに居なくてもいいのです。近くに居させてくだされば・・・」

「でも、もう、あなたとわたしは姉妹じゃなくなってしまったのよ。少なくともわたしの意識の中ではね」

「いいえ、お姉様、わたくしたちは永遠の、本当の姉妹です。だから、近くに居てもいいとおっしゃってください。お姉様がいいとおっしゃってくださいらなかったら、わたくしは飛行機から飛び降りて死にます」

「仕方がないわね。でも、お父様やお母様にちゃんと承諾をもらったの？」

「ちゃんとじゃないけど、この前こちらに伺ったとき、父は、一旦日本に帰れと言いました。それから支度をすると・・・今度も十分支度はしてきていませんが、お金は持って来ました」

「分かったわ。そのことは、賢さんと、あなたと、三人で相談しましょう。今夜ボールでね。ボールは今わたしのところにあるわ」

賢と祐子はボールの話をした。祐子はボールの持つ力のすごさに改めて感心した。マリーは目をきょろきょろさせていた。一連の会話を聞いて驚いた。ここにいる者達は一体何者だろうと思った。祐子の存在の大きさには完全に脱帽しているが、ここにいる者達の意識の高さも祐子と同じレベルにあると感じた。マリーが祐子の方を見ると、祐子はマリーに微笑みを返した。

「マリー、面白いでしょう。この人達の心は、飛び抜けて純粹なのよ。これから、接触することもあると思うから、よく憶えておいてくださいね」

「ママ、分かりました。凄い人たち。わたし、びっくり」

賢がセドナに行ったときの話をした。パワースポットでの体験とそれぞれが超能力的な現象を体験したことを話すと、祐子は空中浮揚を見せてほしいと言った。賢は了解し、瞑想状態に入った。暫くして、賢の身体が空中に浮いた。マリーはびっくりして口を開いたまま、放心したようになった。鹿島は上を向いていて椅子から転げ落ちた。香川も信じられないという顔をして、周りの人たちをきょろきょろ見回している。亜希子と梓は微笑んで見ていた。祐子は深く深呼吸をした。涙が一筋祐子の頬を伝って流れた。賢はまもなくゆっくり降りて自分の席に戻った。全員の気持ちが落ち着くのを待って、祐子が立ち上がって言った。

「今日は本当にありがとうございました。皆さんと握手はできません。わたしの気持ちが揺れてしまいますから」

祐子は深々と頭を下げた。全員立ち上がり、深く頭を下げた。マリーはまだ立ち上がることができないでいた。

帰り道、康介はゆっくり運転した。全員、夢を見ているような心地よさを感じた。

ホテルに着くと、それぞれ、自分の部屋で休息を取ることにした。鹿島はフロントのロビーで休むと言ったが、香川が自分の部屋に来て、キガリのことを教えてほしいと頼んだ。康介は了解した。

賢は部屋に入ると、ベッドに身体を投げ出した。瞑目すると祐子の姿がまぶたの裏に現れた。

「祐子、ありがとう。おまえの元気な姿を見られて、本当に嬉しいよ」祐子が応答した。

「あなた、今ボールは手元がないのよ。でも、あなたが分かるわ。あなたの胸に飛び込みたかったのよ。ありがとう。いつかあなたの元に戻るわ。それまで、元気にしていてね」

祐子の姿が瞼から消えた。賢はふと、うとうとした。不意に何かが顔に触れたと思って、飛び起きた。亜希子だった。亜希子は水色のブラウスと、臙脂のスカートに着替えていた。

「どうした？亜希子」

「あなたにお話ししたいことがあって」

「うん、あとどのくらい時間がある？」

「40分ほどあります」

「分かった。話してごらん」

「はい、わたくし、とても辛いお話を聞いてしまったのです。父と母が話していました。わたくしは盗み聞きするつもりはなかったのですが、家に洋服を取りに戻ったときのことですが、階段を降りて居間に入ろうとしたとき、二人の話している声が聞こえてきました。わたくしが貰い子だということを話していたのです」

「それじゃ、亜希子は養女なんだな？」

「はい、でも、それだけではありません。この前、申し上げたとおり、わたくしと祐子お姉様は2卵性の双子だったのです。生まれたときは、祐子お姉様の方が早く生まれたので、姉と決めてあったようです。でもその会話の中では、母がわたくしは直ぐに養女に出されたのだと言っていました。そして、本当の両親が事故に遭って、二人とも……」亜希子は涙を流した。ハンカチを出して目を押さえるようにして、涙を

拭うと話を続けた。賢は黙って亜希子を見つめていた。

「二人とも亡くなってしまって、祐子お姉様が叔父の家に引き取られたようなのです。わたくしはその話を耳にしたとき、あまりの衝撃に、座り込んでしまいました。でも、気を持ち直して、直ぐに自分の部屋に戻り、そのままベッドに倒れ込みました。暫くして、ようやく気を持ち直して、家を飛び出しました。」

「それは何時のことだ？」

「はい、この前、あなたと愛子さん、梓さんと海外旅行に出る少し前のことです」

「そうか、どおりで、亜希子の様子がおかしいと思った」

「わたくしと、祐子お姉様は、二人っきりの姉妹なのです。本当の姉妹なのです。今日も祐子お姉様にその話をしてしまおうかどうしようかと迷いました。でも、大勢の方がいらっしゃったのでやめました。それに、祐子お姉様に与える衝撃も計り知れないと思ったのです」

「うん、話さなくてよかったよ。だから、ここに住みたいんだな」

「そうです。それが一番大きな理由です。でも、苦しんでいる人たちを救いたいと思う気持ちに、偽りはありません。幼いころより、ずっとそう思って生きてきました。あなた、わたくしがここに住めるように、助けていただきたいのです。本当はあなたにもここに住んでいただきたいのですが・・・それが無理なのは分かります。ですから・・・」

「うん、分かった。だけど鹿島さんの話じゃないけど、並大抵の覚悟じゃ、アフリカに独りで住むことなんてできないぞ」

「わたくしは、祐子お姉様の近くに居られれば、それだけでいいのです。わたくしたちは、二人きりなのですから・・・おねがいだから、わたくしにお部屋を探してください」

亜希子は再び涙を拭いた。

「そういうことなら、鹿島さんに真剣に頼んでみよう」

「うれしいですわ・・・あなた、でも、そればかりじゃないのです。わたくし、今の母からわたくしの実の両親の写真をお借りしました。母はいぶかしげにそれを渡してくださり、どうするのだとお聞きになりました

た。わたくしは祐子お姉様の日本での足跡を記録するために必要で、失踪でわたくしを呼び戻して下さったことを書き留めるときの参考にしたと言いました。そして、1日だけ貸していただいたのです。母は、渋々引き出しの奥から写真を出してきて、貸してくださいました。わたくしはその写真を持って、わたくしたちのマンションに行き、誰も居ないときに原さんのオーラビジョン・システムを使って、実の母をお呼びしたのです。画面にお映りになった実の母に確認致しました。母はもうお忘れになっていらっしゃるようですが、わたくしの話す娘達という言葉をお聞きになり、はっきりと思い出され、説明してくださいました。わたくしの本当の名前は「亜紀」、「き」の字が紀元前の「紀」で、祐子お姉様の本当の名前は「由宇」、「由」という字に宇宙の「宇」だったので。しかも、二人とも宝物のように大切なので、絶対養女になど出していないとおっしゃったのです。わたくしは分からなくなりました。今の両親の会話では、わたくしが、本当の両親から養女として貰われたとお話しされていたのです。今の両親が二人きりで、嘘のお話をされている筈はないと思いました。わたくしは亡くなった実の父もお呼びしてみました。父は二人が宝物で、知り合いの方達みんなにご自慢して歩かれたとおっしゃいました。父にそのころのご友人のお話を伺ってみました。わたくしの両親の名前も、祐子お姉様を養女に引き取った叔父さま達の話もされませんでした。他にも遠縁の親戚があるようで、その方達の方がずっと親しくされていたようです。わたくしはそのとき父がおっしゃったお友達のことを調べていて、驚きました。ご親交の篤い方々が3人いらっしゃったようですが、その内のお一人が、どうやらあなたのお父様の様なのです。もしそうだとすると、あまりの偶然に唾然としてしまいます。どうして、こんなに広い世界で、身近な人たちが現世的にも繋がっているのでしょうか？あなたとわたくしの出会いも、しかるべくしてあったのでしょうか？このことはわたくしが元の自分に返る時まで、黙っていようと思っていました。その時が今なのです」

「亜希子、本当に辛かっただろう。今のご両親のお話を聞いた後、よく平静でいられたね。たぶん僕たちの出会いも、予定されていたことだろ

う。出生の前にいろいろなことを計画したんだろうな。あちこちに目印を付けておいたんだと思うよ。必ず巡り逢って、共に生きられるように……」

「あなた、わたくしのお話を最後まで聞いてくださって、ありがとうございました」

賢と亜希子は連れだってロビーに降りた。既に香川と鹿島がロビーの隅にあるソファーに腰掛けて話し込んでいた。二人が近づくと、鹿島が振り向いて言った。

「亜希子さん、お話は済んだっすか？」

「はい、済みました」

賢が言った。

「鹿島さん、香川さん、折り入ってお願いがあるのですが……」

亜希子の顔が神妙になった。鹿島が応えた。

「なんすか？」

「やはり、亜希子さんは、どうしてもここに住みたいのだそうです。何とかご援助いただけないでしょうか？」

「やはりそうっすか。今、香川さんとその話をしていたところなんす。二人で何とかサポートしようということになりましたっすよ」

亜希子の顔が、微笑みに変わった。

「ありがとうございます。わたくし、なんとお礼を申し上げてよろしいか分かりません。わたくしのような者でも、ここで暮らすことができるでしょうか？」

「さあ、それは亜希子さん次第だと思うっすよ。それと、ここに住むためにはいろいろな手続きが必要っすから、忙しいっすよ。覚悟しておいてね」

「はい、よろしくおねがいたします」

賢も鹿島に向かって深々と頭を下げて、礼を言った。香川が言った。

「僕も、微力ながら、お手伝いします。ただ、このことは社には内密にしておいてください。わたしもここにいられなくなりますので。むしろ、本社からの指示で、亜希子お嬢様のキガリへの逗留を阻止するように指

示が来る可能性の方が大きいと思います」

賢が言った。

「今回ここに寄ることは内密になっています。勿論、疑いの目で見られるでしょう。僕の本意ではありませんが、虚偽の報告をします。ナイロビの香川さんを訪問しただけと報告します」

「みなさん、わたくしのために、いろいろご迷惑をおかけすることになって、本当に申し訳ありません。どうか、お許してください」

鹿島が言った。

「亜希子さん、大丈夫っすよ。任せておいて。俺だって、香川さんだって、亜希子さんと同じように、何かに突き動かされてここに住んで居るっすから、全力で支援するっす」

香川も言った。

「そうですよ。亜希子お嬢様、わたくしは亜希子お嬢様がこちらで生活できるように、出来る限りの協力を致します」

「ありがとうございます。・・・香川さん、わたくしも祐子お姉様と同じように、アキと呼んでくださいませんか？」

「えっ？ どうしてですか？ 亜希子さんじゃないんですか？」

香川が言った。

「いいえ、わたくしも今までとは別の人間になって生きてゆきたいのです。ですから、アキと呼んでください」

香川は初め躊躇していたが、賢が

「そうしてあげて、いただけませんか？」

と言ったので、ようやく頷いた。康介は

「いいっすよ」

と気楽に了解した。少しして、梓が降りて来た。梓は翌日のフライトを確保するのに苦労したと言った。キガリから一旦ナイロビに戻り、そこからシドニーに飛ぶことになったと言った。賢が言った。

「梓、申し訳ない。亜希子さんと香川さんの分はキャンセルしてほしいんだ。二人は明日は発たないから」

梓はがっかりした様子もなく、快く返事をする、理由も聞かずに直ぐ

にまた部屋に戻って行った。賢が言った。

「これでいいんだね？」

亜希子が黙って首を縦に振った。香川も「はい」と応えた。

食事が済んで、賢が部屋に戻ったのは8時過ぎだった。部屋に入ると直ぐに亜希子がやって来た。二人は祐子にコネクションを張ることにした。ボールに意識を集中し、続いて祐子に意識を向けた。直ぐにコネクションが確立した。祐子も待っていた。先ず、賢が祐子に話しかけた。

「祐子、今日は会ってくれてありがとう。君が立派になっていて驚いたよ。圧倒されてしまった」

「あなた、あれはわたしの姿じゃないのよ。ママユウコは祐子でなくてママになったの。わたしが無くなった姿なの。でも、今日は時々、以前の祐子に戻りそうになったわ。だって、わたしの大好きな人たちが大勢来てくれたんだもの。あなたの姿が目の前にあったのに、わたしはママを維持したの。今はそれが一番大切な。分かってくださるわね」

「うん、俺なりに十分分かっているつもりだ。俺たちは、時々意識で会っているだろう。そのときの君が以前の君だと思っているよ」

「あなた、ごめんなさい。みんなが帰った後、わたしは喜びに打ち震えたのよ。悲しみじゃないわ。喜びよ。わたしを救うために、みんなが頑張ってくれた。わたしはそれだけで、もう、何もいらぬの」

「祐子、僕たちには意識での会話もできる。もう、直接会わなくても、大丈夫だね」

「ええ、大丈夫よ。あなた、そこに亜希子さんも居るのでしょうか？」

「うん、亜希子はやはり、ここに残ることになった。受け入れてやってほしいんだ。亜希子もずいぶん苦しんだ結果だからな。今、亜希子に替わるよ」

亜希子は瞑目して、祐子に話しかけた。

「お姉様、今日はありがとうございました。わたくしは、お姉様の近くで、生きていきたいのです。そして、できるだけ大勢の亡くなられた方々の魂を、慰めてあげたいのです。この国には、沢山の彷徨える魂があるように感じました。どうか、わたくしがここに住むことを、お許しくだ

さい」

「亜希子さん、貴女は、貴女の選んだ道を生きたらいいわ。もし、この国に生きる道を選んだのなら、わたくしは何も言わないわ。でも、世界中には恵まれない人たちが、数え切れないほど居るのよ。どうして、この国でなければならないの？」

「お姉様の近くに居たいのです。わたくしにはお姉様しか居ないのです」

「お父様や、お母様がいらっしゃるじゃないの。何不自由なく生きてゆくことができるのに、わざわざアフリカまで来て、苦しい道を歩む必要があるのかしら」

「でも、お姉様はこの国で生きていらっしゃいます。この国の人たちと共に生きてゆかれる覚悟をされています。わたくしもそうしたいのです」

「あなたもそうしたいのね。本当にお父様や、お母様はお許しになったの？」

「いいえ、わたくし自身が決めたことです。もう、父や母の意志で生きてゆくのは止めました」

「分かったわ。少し賢さんに替わってくれるかしら？」

賢は意識で二人の会話を聞いていたが、祐子に向けて語り掛けた。

「祐子、亜希子の意志は変わらないよ。僕たちがどんなに反対しても、聞かないだろう。あまり強制すれば、テレポーションしてしまうから、その方がよほど危険だ。祐子、ここは亜希子を受け入れてやってくれないか？僕からも頼むよ」

「分かりました。そうと決まったら、亜希子さんに、どこに住んで貰うか検討しましょう。ブチやクツという部族の真っ直中に住むのはどうかと思うけど。あなた、どう思いますか？」

「いや、むしろ、君の直ぐ近くに住ませた方がいいと思うけど、どうだろう。君は大変かもしれないけど、是非そうしてやってほしいんだ」

「いいえ、それはできないわ。それはあまりにも危険です。むしろ、部族色の薄い、街中のセキュリティのしっかりしたコンドミニアムの様な場所がいいと思います。鹿島さんの住んでいるアパートなんかはどうかしら？NGOの人たちも住んでいるようだし」

「女性一人で大丈夫だろうか？」

「大丈夫でしょう。NGOの方々の中に、女性も居ると聞きました。明日のフライトは何時なのかしら？」

「夕方4時15分だよ」

「あなた、明日、アパート探しをしたらいいわ。鹿島さんのところが空いていればいいけど。住まいさえ決まれば、ビザの件は何とかなるでしょう」

「祐子、ありがとう。じゃ、亜希子に替わるよ」

そう言うと、賢は亜希子に合図した。亜希子は待ち兼ねたように瞑目し、祐子からの呼び掛けを待った。

「亜希子さん、明日、賢さんと一緒にアパートを探して貰うといいわ。コンドミウム風のところにしたらいいと思うのよ。わたしは明日は手が離せないの、一緒に行けないけれど、時間が出来たら直ぐに連絡するわ」

「お姉様、ありがとうございます。よろしくお願ひいたします。できるだけ、お姉様の足手まといにならないように致します」

最後に賢が祐子に対してしばしの別れの挨拶をして、コネクションを切った。

この夜は亜希子にとって、賢との最後の夜だった。亜希子は一旦自分の部屋に戻ると、シャワーを浴び、荷造りをしてから、再び賢の部屋に戻って来た。

翌朝、亜希子は賢の腕の中で目を覚ました。それが新しい門出の朝だった。二人がレストランに降りると、既に梓が席を確保していた。ブッフエスタイルの料理だった。

「おはようございます」

賢と亜希子がそろって挨拶をした。

「おはようございます。リーダー、今日の行動計画を教えてください。わたくしはアフリカに入ってから、日本と連絡を取っていません。それで、よろしいんですね」

「梓、ありがとう。それでいいよ。今日はキガリ市内のアパート探しに

行って、それからここを発ちたいと思う」

「亜希子さん、やはり残るんですね」

「ええ、いろいろ、ご心配やご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした。昨日、皆さんに認めていただきました。これからは、ここで頑張ろうと思います」

賢と亜希子は揃って料理を取りに立った。そこに香川が入って来た。

「おはようございます」

「おはようございます、香川さん」

「ここはあまり暑くないからいいですね。亜希子お嬢様も、いえ、アキさんもここなら、比較的快適にお過ごしいただけるとおもいますよ」

そう言いながら、少し照れるように梓の居る席の方に向かった。祐子への心配が一応解消されたことで、香川の意識は亜希子にも向いてきていた。賢たちが料理を取って席に戻ると、香川が言った。

「亜希子お嬢様、いえ、アキさんはまるで、祐子お嬢様と双子のご姉妹でもあるかのようですね。これほどまでに一緒にいらっしやりたいとお思いになるところを見ていると、本当にそんな気がしてしまいます」
亜希子が言った。

「そうですわよ。祐子お姉様と、わたくしは、双子なんです。もう、離れられませんか、ふふふっ」

陽気に笑いながら話す亜希子に香川も同調した。

「やはりそうですか、はっはっは」

香川は亜希子が冗談を言っていると思ったようだった。梓も笑った。亜希子の気持ちが晴れて、今までに見たこともないほど明るくなっている。その姿を目にすると、賢はこれから訪れるであろう、亜希子の厳しい活動のことを思い、複雑な感情が湧いてきた。レストランの窓に朝日が当たり、引かれたカーテンの間から差し込む木漏れ日がテーブルにまで届いて、穏やかな雰囲気醸し出していた。対面に座っている亜希子に向かって、賢が言った。

「亜希子とも暫くのお別れだな。元気で暮らせよ」

「あなた、大丈夫ですわよ。寂しくなったら、レポートして会いに行

きますから。ふふふっ」

賢は、まんざら冗談でもなさそうに感じて、少し微笑んだ。香川が言った。

「なんですか？そのテレポートって？」

「そうでしたわ、香川さんは、ご存じなかったのでしたわね。わたくし、自分の行きたいところに空間移動できるのですよ。少しエネルギーは使うようですが・・・」

「そ、それじゃ、昨日の賢さんの様に、空中に浮かんで飛んでゆけるっていうんですか？」

「いいえ、消えるのですわ。でも、これまでは自分の意志ではできなかったのです。それが、この間セドナのパワースポットで、渦に巻き込まれてから、まるで高速で歩いているように、それができるようになったようなの」

香川は、信じられないというような顔をしている。賢が驚いて、聞いた。

「亜希子、本当か？そこまでできるようになったのか？」

「はい、きのうの午後、あなたのお部屋に伺ったときも、意識的にやってみました。ただ、行きたいと想うのでなくて、初めに目的地をはっきりとイメージして、通過する場所もあらかじめ決めてみました。すると、あの車のナビみたいに自分の通る道がはっきり頭の中に展開されたのです。その道筋は大体、自分の意識したとおりにできているようです。それから移動しようと意識してみたのです。そしたら、あなたの部屋のベッドの脇まで、まるで空を飛んでいるように移動している自分が分かりました。でも、一度も行ったことのない場所へはどうやって、移動したらよいのか分かりませんが・・・」

「それは凄い。だけど、むやみにテレポートしない方がいいよ。まだ、どうやって目的地を確定するのかについて、強い確証が持てていないだろう。不安定さが残っている限り、危険性はゼロではないからね」

「はい、いつもあなたがおっしゃっているので、それはよくわかってるつもりですわ」

食事が済んで、4人がコーヒーを飲んで歓談していると、暫くして鹿島

が現れた。

「みなさん、おはようございます。よく休んだ？」

皆、挨拶を返した。

「今日発つんですね。で、アキさんはどうするの？」

そう言われても亜希子は直ぐに反応しなかった。鹿島が自分の方を見ているので、はっとして応えた。

「あっ、ごめんなさい。わたくしのこと……今日は、アパートを探すのをお手伝いいただけませんか……」

「いいっすよ。みんな了解済みっすね？それならいいっす。アキさんはゴリラは大丈夫っすか？」

「えっ？何ですか？」

「ゴリラ、あの動物園にいる黒くて手の長い、猿の大きい奴っすよ」

「あの一、ゴリラがどうかしたのですか？」

「あちこちにゴリラがいるっす。ゴリラに出会っても大丈夫っすか？」

「いいえ、はい、だいじょうぶ、だと……大丈夫です」

亜希子はおどおどして、それでもはっきり答えた。

皆、笑った。鹿島が言った。

「よく、道路に出てくるんす。こちらが何か特別などをしなきゃ、おとなしいっすから、こわがって逃げたりしなきゃ、大丈夫っす」

「は、はい、大丈夫です」

また、みんな笑った。鹿島はウェイターにコーヒーを頼むと、その日の行動計画を確認してから、亜希子に向かって言った。

「アキさん、実は、俺の住んでるアパート2部屋空いているっす。そこでもよけりゃ、頼んでみるっすけど」

亜希子は嬉しくなった。

「ありがとうございます。是非……」

賢が間に入って言った。

「鹿島さん、ありがとうございます。そこはセキュリティはしっかりしていますか？それと、設備などはどうですか？女性が独りで住んでも、大丈夫でしょうか？」

「賢さん、すごい気の配りようっすね。心配ご無用、と言いたいところだけんど、日本のマンションの様なわけにはいかないっす。ある程度のリスクは覚悟していないとね。だけんど、NGOの女性も住んでますよ」賢が執拗に質問した。

「そこは、地域的には紛争なんかの無いところですか？」

「町の外れっすよ。まあ、自分の目で、確かめることっすね」

亜希子が言った。

「あなた、鹿島さんが推薦されているところですから、大丈夫ですわ」亜希子は、賢がすんなりOKしないので、やきもきした。結局全員で、直ぐに見に出掛けることになった。ホテルから車で10分ほどのところだった。アパートは2階建てで、敷地全体が2メートルほどの高さのブロック塀で囲まれていて、車の通れるゲートがあった。ゲートは無人だったが、路面に1メートル間隔で車輪をバンピングさせるコンクリートのバンプが設けてあり、急速では通り抜けられないようになっていた。日本ではほとんど見掛けないが、車で進入、逃走するのを防ぐ役割をする。賢はアリゾナで、あちこちにこのバンプを見掛けた。これがあることだけで、犯罪者はこのコンパートメントが犯罪者に対して警戒措置を施しているという意識を起こさせ、接近しにくいという心理的な効果を与えることも狙っているのだと思った。ゲートをゆっくり通り抜けて、芝生の敷いてある中庭の奥の駐車場に車を停めると、亜希子が言った。

「ここ、いいですね。ホテルより、安全な気がします」

鹿島は軽く頷いた。鹿島がポケットから鍵を出し、アパートの共同の入り口のドアを開けた。全員が中に入ると、鹿島は再び鍵を閉めた。中は採光が考えられていて、照明を点けなくても十分に明るかった。少し進むと、住人共用の広いラウンジの領域に入った。周辺に4個の丸テーブルとそれぞれに4つずつ椅子が用意されていて、端のテーブルに西洋人らしい男性と女性が向かい合って座り、読書をしていた。ラウンジの奥が事務室のようだった。鹿島が亜希子と賢に附いて来るように言い、事務室に入った。中には中年のルワンダ人と思われる女性が座っていた。鹿島はスワヒリ語で話し掛けた。

「*****」(おはようございます。アパートを探している僕の友人を連れて来ました。少し見学させてもらえますか?)

「*****」(鹿島さん、おはようございます。どうぞ、2階の211号室と1階の104号室が空いています。鍵はこれです。ご自由にご覧ください。何か質問があったら、見学の後で、おっしゃってください) 亜希子もスワヒリ語で

「*****」(よろしくお願ひします)

と言った。事務員はにっこり笑った。

「俺の部屋は2階なんす。2階の西の端っこの部屋っす」

事務員の許可を得たので、康介は全員を連れて、1階の部屋に向かった。部屋の北側に通路があり、通路と外庭とは2メートルほどの高さのコンクリートの壁で仕切られていて壁をよじ登っての進入を防ぐように、壁の外側の上端に獣返しの様な鉄製のくさびが埋め込まれていた。その通路から直接部屋に入ることができる。5つの部屋を通り過ぎると、共同の流し台があった。康介が流し台の使い方などを細かく説明した。そこで洗濯などができると言った。空き部屋はその流し台の直ぐ隣の部屋だった。部屋は南向きだった。コンドミウム風の2部屋に分かれたアパートだった。入り口を入ると、直ぐにキッチンがあり、その奥が居間になっていた。左手にドアがある。そこが寝室だと康介が言った。キッチンにはほとんどのものが揃っていた。亜希子は備え付けの冷蔵庫やレンジを開けてみた。新品ではないが、きれいに清掃されている。調理台の下の引き出しを開けると、ナイフやフォークなどキッチンウェアが5人前ほど揃っていた。台所に続く居間にはソファーとテーブル、2客の椅子が置かれている。居間の奥には大きめのガラス窓があり、幅1メートルほどのベランダがある。そこに洗濯物などを干せるようになっていた。ベランダの先に鉄条網のある金属製の柵が張られている。部屋の入り口の直ぐ左に付いている扉を開けると寝室だった。寝室にはダブルサイズのベッドやドレッサーがあり、5段のチェストも用意されていた。亜希子はチェストも開けてみた。中にはベッドシーツ、カバー、枕など、寝具が一通り入っていた。亜希子はベッドに腰掛けてみた。あまりクッシ

ョンが効いていないようだったが、それでも亜希子は納得したように頷いたりしている。賢も手でベッドの上を押してみた。畳より、少し柔らかい程度のベッドだった。賢が亜希子に言った。

「亜希子、こんな硬いベッドで眠れるか？」

「わたくし、やわらかいベッドより、硬いベッドの方が好きです。健康によいのですよ」

賢は康介に聞きながら、電気設備などを確認した。電話機はキッチンの壁に据え付けられていた。照明器具はそれほど派手さはなかったが、古いとは感じなかった。「電気はよく停電する」と、康介が言った。バスルームは広々としていたが、バスタブは無く、便器とシャワーだけのシンプルな造りだった。賢がまた亜希子に聞いた。

「亜希子、バスタブが無くても大丈夫か？」

「はい、わたくし、シャワーの方が好きですから大丈夫です」

梓と香川は各部屋を覗いただけで、すぐに入り口付近のキッチンのそばに戻り、3人の動きを見つめていた。賢が梓に向かって言った。

「梓、感想はどう？」

梓はさらりと言った。

「いいんじゃないですか？わたくしなら、部屋はOKですね」

一行は1階の部屋を見ると直ぐに2階に上がった。階段は意外に広く、途中に踊り場があった。2階の造りも1階と同じようだったが、北側の壁の上端に付いていた獣返しのような金具は無かった。空いている部屋は一番突き当たりの東向きの部屋だった。康介が言った。

「ここがこのアパートで一番いい部屋なんす。少し値段が高いみたいだけんど。つい1週間ほど前に空いたんす。公務員が住んでいたようっす」明るい部屋だった。ベランダから遠方の景色が一望できた。小高い丘が幾重にも重なって見える。設備は1階の部屋と同じだったが、寝室の東側の壁に窓があり、外を眺めることができた。亜希子が言った。

「わたくし、このアパートが好きです」

結局、亜希子は211号室に決めた。賢が事務員に住人のことを尋ねた。事務員は、「個人的な内容なので、詳しいことは話せないが、NGOの

人5人と、ビジネスマン2人、それに大学の先生が住んでいる」とだけ教えてくれた。NGOの1人と、大学の先生の二人が女性とのことだった。亜希子はパスポートを見せて、直ぐに契約を行いたいと言った。しかし、賢と康介が契約書を熟読してからと言い、一旦ラウンジに出て、テーブルを確保すると、全員で手分けして、契約書を通読した。英文とスワヒリ語のバイリンガルで記載されていた。外国人の滞在に関して、特に厳しい取り決めはなかったが、賢は特定種族との関係の項目が気になった。ブチ族とクツ族のどちらか、その他の種族、あるいは外国人と明記する欄があり、この国にどの種族の知り合いがいるかを記載するようになっていた。全員、一応納得して、OKのサインを出した。亜希子が契約者欄に署名すると、保証人欄には康介がサインした。亜希子はこれほど慎重に自分の事を考えてくれる人たちに、心の底から感謝した。契約を終え、契約金とこの月の日割り計算されたアパート代の支払いを済ますと、即日の入居が可能になった。アパートを出て、一旦ホテルに戻ると、賢は梓に、「もう一日予定を延期しよう」と言った。梓は、理由も聞かずに素直に了解し、直ぐに部屋に戻ってフライトの変更を行った。賢はフロントで自分と梓の延泊を頼み、亜希子だけをチェックアウトさせた。それから、一旦、アパートに戻り、亜希子の荷物を2階の211号室まで運んで、全員で亜希子の衣類や当面の食料、生活に必要な品物の買い出しに出掛けた。亜希子は

「必要最低限のものだけで結構です。後は自分で時間を見て調達いたします」

と言ったが、賢は

「できるだけ用意してしまおう」

と言った。買い物には時間が掛かった。途中で昼食を摂り、康介の案内で、様々なものを買集めた。一通りのものを買終えると、一旦アパートに戻り、品物を亜希子の部屋に運んだ。それから全員でもう一度外に出た。問題は食事だった。康介が、亜希子にルワンダでの食事について、何度も説明した。康介は、とりあえず1週間はアパートの中でも食事できるから、保存できる食料を買貯めるように勧めた。賢はこの日

の夕食と翌日の朝食を亜希子と共にすることにした。夕食は、前回ルワンダに来たときに康介が案内してくれた、丘の上の BABA というレストランに決めた。賢、梓、亜希子の3人は象の人形を憶えていた。前回来たとき、康介は、ここが一流のレストランだと言ったのを思い出した。亜希子は自分で注文してみることにした。ウェイターがメニューを持って来ると、先ず康介がシチューを頼んだ。次に亜希子がティラピアのフライとソンベのソテーという料理を注文した。賢が、それは何かと聞くと、亜希子は分からないと応えた。他の者達はすべて、康介に任せた。康介が亜希子に説明した。

「ソンベって、キャッサバと言う野菜の葉をすりつぶしたもので、グリーンピースとか人参と一緒に煮込んだものだよ。アキさん、この国の食事は日本みたいなバリエーションは無いよ。どこのレストランも大抵ブッフエタイプだけど、多分、1週間で飽きちゃうよ。まあそれから忍耐だね。」

亜希子以外はみな、牛肉の串焼きと、アボガドのサラダ、それにフライドポテトを注文した。康介と賢がルワンダのビール・プリムスを注文すると、亜希子も呑むと言った。結局プリムスで乾杯することになった。賢はボトルを手にする時、亜希子と梓のグラスには少しだけ注いだ。亜希子は乾杯するときにはここにこしていたが、呑み終わると少しして、しくしくと泣き出した。

その日は夜10時ころまで全員亜希子のアパートの部屋に居た。亜希子は鼻歌を歌いながらベッドメイキングをしたり、キッチンウエアを引き出しに整理し直したりした。梓がそれを手伝っていた。男達はコーヒーマーカーやドライヤーそれと、洗濯物を干す折りたたみ式の器具などの備品を、取説を見ながら組み立てたり、あちこちを点検したりしていた。全員が帰る時になって、亜希子が言った。

「皆さん、いろいろありがとうございました。皆さんのご恩は一生忘れません。わたくし、がんばります」

亜希子が袖で涙を拭いた。梓の目にも涙が浮かんだ。賢も涙が込み上げてきたが、気を持ち直して言った。

「亜希子、最期のお別れのようなこと言うなよ。鹿島さんが居るし、いざとなればテレポーションだってあるじゃないか。それに祐子のところにはボールもあるし……今夜は少し寂しいけど、明日の朝、また会えるよ。がんばれよ」

亜希子は涙を流すまいと必死に堪えていたが、とうとう堪えきれずに、入り口の近くに立っている賢の胸に飛び込んだ。賢は亜希子の肩を優しく抱いて言った。

「亜希子、辛かったら、一緒に帰ってもいいんだよ」

亜希子は賢の胸の中で首を振った。涙を振り切るように手首で目をこすると言った。

「もう、大丈夫です。明日会いましょう。みなさん、お休みなさい」

その夜、亜希子は眠れなかった。全員が部屋から出て行くと、急に心細くなった。

「日本からずっと離れたアフリカの小さな国で、本当に一人で生きてゆくことができるのだろうか？ お金は沢山持ってきたとは言え、せいぜい1年が限度だろう。その後はどうして生きてゆけばいいのだろうか」いろいろなことが頭をよぎった。

「自分の取っている行動は、みんなに迷惑を掛けているだけではないのだろうか、大それた事を言ったけど、本当に人々の魂を救うことなどできるのだろうか？ もし、祐子お姉様が自分を受け入れてくださらなかったらどうしようか？ 愛するあのひとは、離れていてもわたくしのことを、大切に守っていてくださるのだろうか？」

これまで生きてきた様々な場面が走馬燈のように、額の裏に映し出されているように思えた。

「わたくしはアフリカの動物に食べられちゃうことはないのだろうか？ このアパートの部屋まで、ゴリラやコブラが昇って来て、わたくしを襲うことはないだろうか？」

怖くて身体が震えた。不安と恐怖に悶々としていて、時々意識が薄れ、また、目が覚めるという繰り返しだった。やがて外が明るくなってきた。亜希子はベッドから降りて東に向いた窓に近づき、外を眺めた。空が紫

色になり、空と丘との境目がオレンジ色に輝いて、太陽が姿を表した。美しい朝焼けが、周りの丘を浮き上がらせてくる。亜希子は窓を開け広げて、胸一杯、朝の空気を吸い込んだ。

「亜紀、がんばりなさい。これからが本当の人生よ」

まだ眠気が襲ってくる。亜希子は全裸になって、バスルームに向かった。シャワーを浴びると、意識がはっきりしてきた。亜希子は初めて、シャワーが如何に心を蘇らせるのに役に立つかを知った。

「身の清めって、これなんだわ」

賢は部屋に戻ると、祐子にテレパシーを送った。直ぐにコネクションが確立した。

「祐子、亜希子のアパートは鹿島さんと同じところに決まったよ。今日からそこに移っているよ。亜希子のことをよろしく頼む。俺は、明日にも次の場所に移動しなくてはならないから」

祐子から直ぐに応答が帰ってきた。

「あなた、でも、どうして亜希子さんはあんなに、わたしの傍に来たがるのかな、どうしても分からないわ。勿論わたしも、亜希子さんの事を思うと、一緒に居られたらいいのにと想着ってしまうけど・・・でも、姉妹になったとは謂え、そんなに時間が経っている訳じゃないし。どうしてかしら？」

「祐子、今の精神状態は、安定しているか？」

「ええ、もう、ほとんど揺れることがないわ。どうして、そんなことを聞くの？」

「いいか、これから話す事は、誰にも言うてはだめだよ。勿論亜希子にも君がこのことを知ったことは内緒だよ。最近分かったことなんだけど、実は、君たちふたりは、本当の姉妹なんだ。それも2卵性の双子なんだ。亜希子が1年遅れて出生届けされたようで、1歳年下になっているけど、本当は同じ年なんだ。このことを亜希子は知っている。祐子のことを気遣って、黙っていたんだ。君に会ったとき、いきなり君の胸に飛び込みたかったのを、じっと堪えていたようだ。君の方が先に誕生したから、

本当の姉なんだ。君たちふたりは生まれてまもなく、一度に両親を失った二人きりの姉妹なんだ。これは本当のことだ。」

暫くの間、祐子から応答が無かった。

「あなた、どうして、今まで黙っていたの？ひどいじゃない。わたしは今、泣いているのよ。亜希子が可愛そうで、わたしは何とひどいことを言ってしまったのかと、泣いているのよ。分かるでしょう」